

鞍川中B遺跡Ⅱ

金沢医科大学水見市民病院建設事業に伴う発掘調査報告

2010年3月

水見市教育委員会

鞍川中B遺跡Ⅱ

金沢医科大学氷見市民病院建設事業に伴う発掘調査報告

2010年3月

水見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。それら、郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

このたび新たな氷見市民病院の建設地となった鞍川地区は、地名の由来に木曾義仲にまつわる伝承が残り、また室町・戦国時代の国人士豪、鞍河氏の本拠地と伝えられる地でもあります。

調査の対象の鞍川中B遺跡では、平成15年から16年にかけて、一般国道415号道路改良に先立つ発掘調査を実施し、多くの成果をあげています。調査では弥生時代中期の川跡が発見され、たくさんの土器のほか、樹皮製の曲物や石器が出土しました。そのほか中世から近世の溜池の跡が見つかっています。

今回の発掘調査では、中世から近世にかけての遺跡の広がりを確認することができました。今回の調査結果を鞍川の歴史に思いを馳せる手がかりとしていただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたってご支援、ご尽力をいただいた方々に、この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

氷見市教育委員会
教育長 前辻 秋男

例　　言

- 1 本書は、平成 21 年度に実施した富山県氷見市板川地内に所在する板川中 B 遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、金沢医科大学氷見市民病院建設事業に先立ち、氷見市病院事業管理室の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社エイ・テックが担当した。
- 4 調査面積は 336m²である。
- 5 調査期間は、平成 21 年 10 月 26 日より平成 21 年 11 月 20 日（実働 19 日）である。
- 6 調査に関する事務は、氷見市病院事業管理室が担当し、調査業務の設計・監督・検査は、氷見市教育委員会生涯学習課が担当した。担当者は次のとおりである。

病院事業管理室　室長：杉村邦明、室長補佐：坂本博之、主査：清水裕史
生涯学習課　課長：賓住哲郎、副主幹：鈴木瑠磨、学芸員：廣瀬直樹
- 7 発掘調査担当者は次のとおりである。

監督員　　氷見市教育委員会　生涯学習課　廣瀬直樹
管理技術者　株式会社エイ・テック　後藤浩之
調査員兼現場代理人　株式会社エイ・テック　大西健吾
- 8 整理作業は、遺物洗浄・注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、遺構図面作成、遺物実測、報告書作成・編集は調査終了後、平成 22 年 3 月まで実施した。
- 9 本書の執筆は、第 1 章・第 2 章第 1 節を廣瀬、その他を大西が担当し、編集は大西・後藤が行った。
- 10 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 11 遺跡の略号は「KRKN-B-09」とした。
- 12 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：上岡優・川上俊雄・河原敏明・小島忠夫・清水弘貴・谷瀬政次・土田覚弘・津里喬・仲井善夫・水口敏行・向井利之・室田保之・森恵次郎・安井民樹・山下進・横田清（以上、氷見市シルバー人材センター）
整理作業員：上田恵子・志郷寺愛・前馬みゆき・南真弓・渡辺悦子
- 13 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

岡田一広・三久建設株式会社・氷見市シルバー人材センター・山口辰一（高岡市教育委員会）（敬称略・五十音順）

目 次

第1章：遺跡の環境	1
第1節：地理的環境	1
第2節：歴史的環境	1
第2章：調査の概要	4
第1節：調査に至る経緯	4
第2節：調査の経過	5
第3章：調査の成果	6
第1節：基本層序	6
第2節：遺構	6
第3節：遺物	10
第4章：まとめ	12
引用・参考文献	13
報告書抄録・奥付	

表 目 次

第1表 周辺遺跡対応表	2
第2表 遺物計測・観察	27

図 目 次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 鞍川地区の既往調査位置図	3
第3図 鞍川中B遺跡2009区 調査区位置・グリッド配置図	5
第4図 基本層序模式図	6
第5図 調査区地区割図	6
第6図 鞍川中B遺跡2009区 調査区全体図	15
第7図 調査区壁面土層断面図(1)	17
第8図 調査区壁面土層断面図(2)	18
第9図 遺構実測図(1) SD01・SD02	19
第10図 遺構実測図(2) SK01・SK02・SK03・SK06・SP03・SP04	20
第11図 遺構実測図(3) SK04	21
第12図 遺構実測図(4) 下段地区遺構①	22
第13図 遺構実測図(5) 下段地区遺構②	23
第14図 遺物実測図(1) 遺構出土遺物(須恵器・土師器・珠洲焼)	24
第15図 遺物実測図(2) 遺構出土遺物(珠洲焼)	25
第16図 遺物実測図(3) 遺構出土遺物(青磁・その他陶磁器類) 表土・搅乱出土遺物・木製品・石製品	26

写真図版目次

- 図版 1 遺跡周辺空中写真（1947 米軍撮影）
- 図版 2 遺跡周辺空中写真（1963 国土地理院撮影）
- 図版 3 1. 調査区遠景（北から）
2. 調査区遠景（南東から）
- 図版 4 1. 調査区全景（垂直）
2. 調査区全景（南から）
- 図版 5 1. 調査前（北西から）
2. 調査区土層断面（東から）
3. 調査区土層断面（東から）
4. 調査区土層断面（北から）
5. 調査区検出状況（南東から）
6. 調査区検出状況（北から）
7. SK01・SK02 検出状況（南から）
8. SK02・SK06 検出状況（北から）
- 図版 6 1. SD01 土層断面①（南から）
2. SD01 土層断面②（北から）
3. SD01 遺物出土状況（南東から）
4. SD01 遺物出土状況（北東から）
5. SK01 土層断面（東から）
6. SK01 完掘状況（北西から）
7. SK02 土層断面（南から）
8. SK02 完掘状況（南東から）
- 図版 7 1. SK05 検出状況（南東から）
2. SK05 完掘状況（南東から）
3. SP03 土層断面（東から）
4. SP04 土層断面（南西から）
5. SK06 土層断面（西から）
6. SK04 南北土層断面（東から）
7. SK04 東西土層断面（北から）
8. 上段地区遺構完掘状況（南から）
- 図版 8 1. 段落ち（SX01）土層断面（南から）
2. 下段地区北部遺構検出状況（南東から）
3. 下段地区南部遺構検出状況（南から）
4. SD04 土層断面（南から）
5. SD05 土層断面（南から）
6. SD06 土層断面（北西から）
7. SK03 土層断面（南から）
8. SK10 土層断面（南から）
- 図版 9 1. SP07 土層断面（東から）
2. SX02 土層断面（南から）
3. SX03 土層断面（南から）
4. SX03 土層断面（南西から）
5. 作業風景
6. 作業風景
7. 作業風景
8. ラジコンヘリコプター撮影風景
- 図版 10 遺物写真（1）遺構出土遺物
(須恵器・土師器・珠洲焼)
- 図版 11 遺物写真（2）遺構出土遺物
(珠洲焼・青磁・その他陶磁器類)
- 図版 12 遺物写真（3）表土・搅乱出土遺物
(須恵器・土師器・珠洲焼・青磁・その他
陶磁器類)・石製品・木製品

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万4千人である。市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもつて富山湾に面している。

鞍川中B遺跡が所在する鞍川地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川下流域南岸に位置する。河畔に平野が開け、背後には丘陵山地が連なる。上庄川は、氷見市南端の大釜山(501.7m)に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ・流域面積ともに最大である。

鞍川地区の北側に当たる上庄川下流域左岸の加納地区の平野には、弥生時代から古代にかけて加納潟(仮称)という潟湖が存在したと推定される。加納潟は南北約1km、東西約0.5kmと推定され、さらに北側の余川川下流域に広がる可能性がある。

鞍川中B遺跡は、上庄川の支流、野手川の東側に立地し、標高は約3.5mである。鞍川では昭和30年代に土地改良が実施され、整然とした水田が広がっている。調査対象地の北側には、能越自動車道氷見北ICのアクセス道路として整備された一般国道415号(通称鞍川バイパス)が通る。

第2節 遺跡の歴史的環境

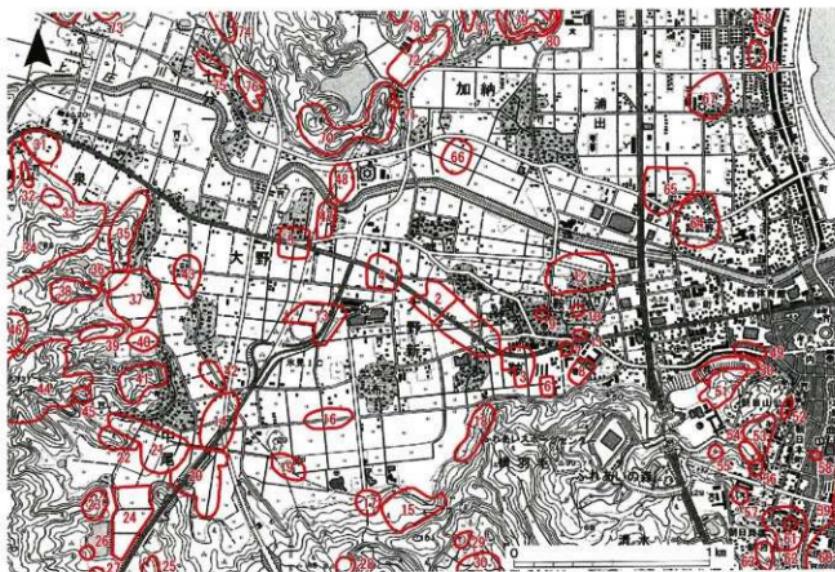
以下、上庄川流域の遺跡について下流域を中心に概観する。

上庄川流域の縄文時代の遺跡は上流丘陵部と下流域に散在している。下流域の縄文遺跡として縄文後期の鞍川寺田遺跡がある。有磯高校グランド造成工事で縄文土器が出土したというが詳細は不明である。

上庄川流域は弥生時代に入って積極的な土地利用が行われていったと考えられる。弥生時代中期の遺跡として鞍川中B遺跡がある。鞍川中B遺跡は加納潟に流れ込む流路のほとりの低地に営まれた遺跡と考えられる。弥生時代後期の遺跡として鞍川金谷遺跡が、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡として鞍川横羽毛遺跡、糠塚南遺跡、沖布A遺跡がある。いずれも加納潟を囲む丘陵縁辺部から微高地に営まれた遺跡である。弥生時代終末期にはいたん丘陵上へ生活圏が移動したのか、朝日山丘陵上に朝日大山遺跡が営まれた。

古墳時代には、上庄川流域から加納潟周辺にかけての丘陵上に多くの古墳が築かれた。その数は、上庄川流域で31群183基、加納潟周辺で6群71基となり、氷見市内で最も古墳が集中する地域である。これはこの地域が、氷見市内で最も広く安定した平野が開け農業生産に適していたこと、臼が峰越えのルートをはじめとする能登と結ぶ街道がこの谷を通っていたことなどが要因と推測される。だが鞍川南方の丘陵上を見ると、丘陵の反対側の布勢湖(現在の十二町潟)に面した朝日山周辺には古墳群が立地するものの、加納潟に面する鞍川側では古墳の存在は確認されていない。

古代・中世においても上庄川中下流域には遺跡が広く分布している。中世には上庄川流域から十二町潟周辺を範囲とする阿努莊という庄園があり、上庄川の水運、能登を結ぶ陸運などの要素を背景として古墳時代に引き続いている開発が行われていたと考えられる。鞍川D遺跡では13世紀代の集落が、鞍川中B遺跡では、中世から近世の溜池状構造が見つかっている。なお、室町・戦国時代には、国人土豪鞍河氏が現在の鞍川周辺を本貫地としていたとされる。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

No	遺跡名	遺跡番号	種別	時代	No	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
1	駿川中合遺跡	354	その他	先史・中世・近世	41	中駿南岸古墳群	343	古墳	古期
2	駿川中A遺跡	308	その他	中世・近世	42	大駿南道跡	265	敷布地	古代・中世
3	駿川D遺跡	250	墓葬	西代・中世	43	大駿沢遺跡	211	敷布地	越文・古代
4	K-B-2遺跡(復刻)	309	散布地	古代	44	千葉里塚跡	50	城郭	中世
5	K-B-3遺跡(復刻)	310	散布地	古代	45	竹原山古墳	142	その他	中世
6	駿川B-遺跡(復刻)	394	散布地	不明	46	上田原城跡	330	古墳	古期
7	駿川B-古墓	139	墓	中世	47	大駿中道跡	371	敷布地	古代
8	駿川今井遺跡	97	敷布地	範文後期	48	七分一堂口遺跡	372	敷布地	古代
9	駿川A-古墓	136	墓	中世	49	七条町遺跡	163	敷布地	範文後期
10	駿川C遺跡	224	散布地	中世	50	新日吉城跡	219	城郭	中世
11	駿川櫛ヶ池古跡	190	敷布地	中世	51	網子大山遺跡	361	敷布地	弥生終末期・中世・近世
12	駿河谷中道跡	52	散布地	弥生後期	52	風景寺中世墓群	133	墓	中世
13	大野川中道跡	317	集落	古代	53	上日寺中世墓群	53	墓	中世
14	神代古跡	368	墓	中世	54	網子古山古墳群	292	古墳	古期
15	沖布A遺跡	51	散布地	弥生・古代	55	網子古内塚穴	140	樁穴墓	古期
16	沖布A-古跡	92	散布地	古代	56	網子古山古墳	55	古墳	(古期・中期前半)
17	沖布C-古跡	252	散布地	古代・中世	57	網子水連塚跡	64	敷布地	範文中期～後期
18	駿河鍋立毛遺跡	251	敷布地	弥生後・古墳前・古代・中世	58	網子駿馬遺跡	210	敷布地	中世
19	駿原南古跡	250	散布地	弥生後・古墳前・古代・中世	59	御門町遺跡	145	敷布地	中世
20	中尾原佐谷内遺跡	49	聚落	古墳・古代・中世	60	若ノ瀬跡	57	敷布地	範文～古代
21	尾中尾原寺跡	36	社寺	平安	61	網子日字路遺跡	85	その他(復刻)	中世
22	中尾原佐谷内古跡	344	古墳・墓	古墳・中世	62	網子良賀	56	貝塚・墓葬	範文前～暮・弥生～古代
23	中尾原子谷内古跡	345	古墳	古墳	63	網子古山古墳群	134	古墳	古期
24	中尾原子谷遺跡	316	聚落	古墳・古代・中世	64	駿河野A遺跡	107	敷布地	古代
25	中尾原子谷跡	46	散布地	古墳	65	駿河野B遺跡	109	古布地	古代・中世
26	中尾原子山遺跡	120	その他(連続地)	中世	66	加野原打田遺跡	194	敷布地	古代
27	中尾原山田遺跡	187	散布地	古代	67	加野原古墳群	109	古布地	古代・中世
28	兜原中道跡	62	城壁伝承地	不明	68	鶴見二ツ山古跡	28	古布地	古代
29	十二月山古墳群	246	古墳	古墳	69	鶴見三月山古跡	59	敷布地	古代
30	十二月山遺跡	242	散布地	古代	70	加野中里古墳群・加野城跡	327	古墳・威震	古期・中世
31	萬種中道跡	257	散布地	古代	71	加野中程經跡	31	耕原	中世
32	篠毛A-古跡	40	敷布地	範文・古書	72	加野古内遺跡	373	敷布地	範文・古代・中世・近世
33	篠毛B-古跡	41	散布地	古墳	73	幡谷上山古墳群	216	古布地	古墳
34	萬種古跡	42	古墳	古墳	74	七分一遺跡	101	古布地	弥生後・古墳・中世
35	往來島遺跡群	329	古墳	古墳	75	七分一B遺跡	259	敷布地	古代・中世
36	泉A遺跡	186	敷布地	範文・古代	76	七分一古墳・古墓	328	古墳・墓	古墳・中世
37	泉C-古跡	256	散布地	古代	77	木曾谷跡	30	城跡	中世
38	泉谷A-古跡群	341	古墳	古墳	78	加納野古山古墳群	326	古墳	古墳
39	尾中尾原古跡群	342	古墳	古墳	79	加納野古山古墳群	150	古墳	古墳
40	豊B遺跡	189	散布地	古墳・古代	80	加納穴石	32	樁穴墓	古墳後～古代

第1表 周辺遺跡対応表



第2図 「鞍川地区の既往調査区域図 (S=1,2,500)

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

老朽化した現在の氷見市民病院に替わる新たな氷見市民病院の建設設計画が立案されて以来、氷見市教育委員会は、市民病院建設担当部局側との間で、埋蔵文化財包蔵地に関する協議を繰り返してきた。当初答申された複数の候補地に対しても、教育委員会として意見を出し、できるだけ埋蔵文化財に影響が出ないよう協力を要請してきた。

平成20年3月には、企画広報室より一般国道415号(鞍川バイパス)周辺の鞍川D遺跡・K B - 3遺跡・大野江淵遺跡について照会があったため、それぞれの遺跡について詳細を回答した。特に鞍川D遺跡については、遺跡が現在の範囲外に広がると推測されるため本発掘調査を要する可能性が高いとの見解を伝えた。

平成20年度に入り、鞍川D遺跡およびその周辺地が新市民病院の候補地になったとの情報が教育委員会に寄せられたが、教育委員会側との正式な協議等は行われないままであった。そのため、平成20年9月25日付で企画広報室長に対して鞍川地内の埋蔵文化財保護についての協力を書面にて促した。

結果として、鞍川地区が正式に新市民病院候補地となったが、当初の予定地よりも一区画西側にずれることで、鞍川D遺跡だけではなく、鞍川中B遺跡に一部かかることが判明した。鞍川D遺跡、鞍川中B遺跡、両者ともに、鞍川バイパス建設に先立つ本発掘調査の結果、遺跡が周辺に広がる可能性が予測されていた。そこで氷見市教育委員会では、平成21年度に国庫補助金の交付を受けて周辺の試掘調査をするため、調整・準備を開始した。

試掘調査は、平成21年5月18日から5月22日まで、実働5日間で実施した。調査対象地は、建設予定地全体であり、面積は約30,250m²である。調査は、遺跡が所在する一般国道415号(鞍川バイパス)の縁辺から開始し、順次調査区を広げていった。最終的な発掘面積は約700m²である。

鞍川D遺跡側では、遺跡及び周辺部に41本の試掘トレンチを設定し調査を実施した。調査の結果、市民病院の病棟建設地を含む広い範囲に遺構・遺物の残存が確認された。鞍川バイパス建設に先立つ本調査で予測していたとおり、遺跡範囲は南側および西側に大きく広がることとなった。遺物は、珠渦続・土器類等があり、中世・近世を中心とする。遺構は、表土直下で溝・土坑等が検出されるが、その深さは10~30cm程度で上面が一部削平されている可能性がある。なお調査区の北西側には湿地帯が広がっていたと考えられる。

鞍川中B遺跡側では、5本の試掘トレンチを設定し調査を実施した。鞍川バイパス建設に先立つ試掘調査結果から、周辺は湿地帯と予想していたが、調査区西側から遺構が検出された。遺構はピット・溝等で、出土遺物は古代・中世・近世のものが主体となる。

試掘調査の終了後、すぐさま病院事業管理室へ調査結果を報告し、埋蔵文化財保護に関する協議を開始した。教育委員会と病院事業管理室をはじめ、市長、副市長、市民部長ら交えて協議は進められ、さらに富山県教育委員会生涯学習・文化財室からの助言も得つつ、埋蔵文化財の保護と病院建設の妥協点を探った。

鞍川D遺跡については、試掘調査で範囲拡大が確認された箇所は駐車場の予定地となるが、表土の剥ぎ取りを行った後に盛土によって造成されるため、遺構への影響は少ないものと考え、本調査は不要と判断した。

一方、鞍川中B遺跡については、遺構が確認された範囲は調整池の建設予定地となっていた。調整池の場所移動や工法の変更など検討を重ねた結果、若干ではあるが調整池の面積を狭めることとし、建設予定地の西側一部を緑地帯として遺構の現状保存を図り、残りの部分は本調査で対応するということになった。

平成21年8月24日、病院事業管理室からの依頼を受け、氷見市教育委員会は鞍川中B遺跡本調査の準備を開始した。

第2節 調査の経過

病院建設の事業計画では、造成工事を平成21年11月から開始し、年度内の敷地造成完了を予定していた。そのため、11月中旬までに本調査を完了することを目指して準備を進めていった。本調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社エイ・テックに業務委託して実施することになった。

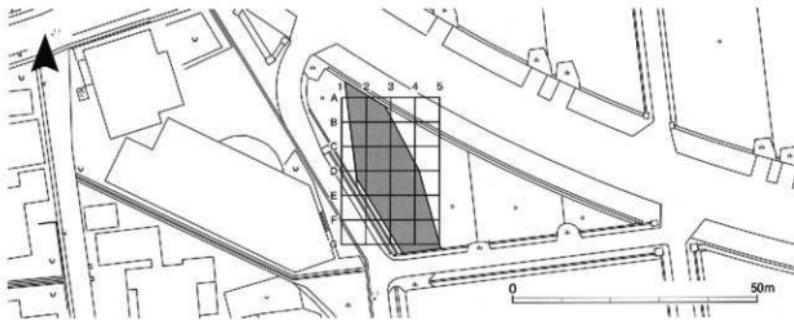
(1) 調査の方法

本調査にあたっては、表土掘削前に国土地標（座標系第Ⅷ系）を用いて5m間隔にグリッド杭を設定し、東西をX軸、南北をY軸とした。X軸方向に西からアラビア数字、Y軸方向に北からアルファベットを割り振ってグリッドNoを設定した（第3図）。

表土掘削、包含層掘削は人力で行い、引き続いて遺構検出を行い、遺構略測図を作成した。遺構掘削にあたっては、半裁もしくはセクションベルトを残して掘削し、土層の記録作業を行ってから完掘した。遺構全体測量は航空測量を行い、必要に応じてトータルステーションによる補足測量を行った。

(2) 調査の日程

平成21年10月26日より調査を開始した。まず調査区の草刈、調査区設定、基準点・水準点測量、グリッド杭設置を行った。10月27日より作業員により表土掘削作業を開始し、10月30日に完了した。11月2日より遺構検出作業を行い、11月5日に遺構検出全景写真を撮影した。11月6日より遺構掘削を開始した。調査区東部の広い落ち込みSX01についてはサブトレーナーを3本掘削し、性格の確認を行ったところ、試掘調査で推定された湿地状の落ち込みではなく、旧地形の段落ちであり、下段の地山面から遺構と思われる掘り込みが確認されたため、SX01全体を掘り下げて下段面の遺構を検出することとした。11月13日にSX01掘削完了、11月16日に下段面の遺構検出を行った。11月19日までにはほぼ全ての遺構を掘削し、11月20日にラジコンヘリコプターによる空中撮影を行い、資材を撤収し調査を終了した。

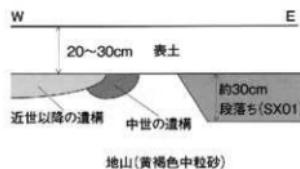


第3図 鞍川中B遺跡2009区 調査区位置・グリッド配置図 (S=1/1,000)

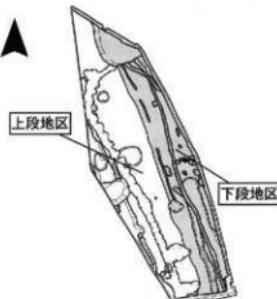
第3章 調査の成果

第1節 基本層序

現況は水田であり、地表面から約20～30cmの表土（耕作土・床土）の下に黄褐色中粒砂（地山）がある。部分的に地山の上に黒色砂質土が散見されるが、遺物は含まれておらず、遺物包含層とは言い難い。遺構は基本的に地山とした黄褐色中粒砂の上面で検出された。各遺構は深さ数cm～20cmほどのものが多く、全体に浅い。鞍川地区では昭和30年代に土地改良がおこなわれたとのことで、遺構検出面が完全に砂であるという点も合わせて鑑みると、現水田以前の地面はかなり削られていると推定される。さらに調査区西部の表土直下には、柱穴列状の溝や廐棄土坑などの現代の掘り込みがみられ、遺構面が擾乱されている。調査区東部では地山面が西部より30cmほど段状に落ちている。旧耕作地の地形と考えられる。この下段部分には、表土と地山の間に整地土とみられる土が水平堆積している（第4図）。



第4図 基本層序構式図



第5図 調査区地区割図

第2節 遺構

今回の調査では、中世と近世以降の遺構を検出した。遺構の種別としては、自然流路・溝（SD）、土坑（SK）、ピット（SP）、その他性格不明遺構（SX）を確認している。遺構番号については、現地調査当時使用したものを本書でも使用する。そのため、番号が欠番となっているものがある。そして調査区東部の段落ち部分の範囲を、現地調査当時「SX01」と呼称したため、本書でも便宜上、この範囲を「SX01」と略称することとする。

さらに、調査区内でSX01より西側、段より上の範囲を「上段地区」、段より下の範囲を「下段地区」と呼ぶこととする（第5図）。

自然流路・溝

SD01（第9図） 上段地区西隅を南北に流れる流路である。検出長19.3m、最大検出幅2.3m、深さ0.06～0.35mを測る。埋土はほとんど砂が占めており、常に水流のあった流路と考えられる。砂の下には粘性のある土と地山の砂が混じり合った土が堆積しており、流路最下面是凸凹している。流路によって中世の遺構面が削られているためであろう。古代須恵器、中世土師器、中世珠洲焼、近世陶磁器が出土した。流路内遺物のみで遺構の時期を判断するのは心もとないが、中世の遺構（SK04など）を切っていることと、遺物に近世より新しいものが含まれないことから、主として近世に機能していた流路で

あると考えられる。旧耕作地形成時に開削された水路の可能性もある。調査区のすぐ西隣にある現在の水路は、SD01 の方向にはほぼ合致しているため、SD01 が耕地整理に伴って現在の水路に整備されたとを考えられる。

SD02（第9図） 上段地区 SD01 の東隣りに位置する南北に走る小溝である。SD01 に切られる。検出長 2.42m、最大幅 0.39m、深さ 0.05m を測る。埋土は単層で、黒色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SD03（第12・13図） 下段地区西隣を南北に走る小溝である。検出長 17.0m、最大幅 0.28m、深さ 0.06m を測る。浅い溝のため、一部途切れる部分がある。埋土は単層で、黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SD04（第12・13図） 下段地区中央を南北に継断する溝である。検出長 28.9m、最大幅 0.5m、深さ 0.05 ~ 0.1m を測る。埋土は黒褐色砂質土が主体で、下位層では地山の砂がブロック状に多く混じり込んでいることから、人為的に掘られたものとみられる。耕作に伴うものであろうか。中世珠洲焼破片 1 点が出土した。

SD05（第13図） 下段地区南部を南北に走る溝である。SD04 に切られる。検出長 13.2m、最大幅 0.86m、深さ 0.1m を測る。埋土は黒褐色砂質土が主体である。遺物は出土しなかった。

SD06（第12図） 下段地区北部を南東～北西方向に走る溝である。SD04 に切られる。検出長 5.4m、最大幅 0.54m、深さ 0.11m を測る。埋土は砂を多く含む黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

土坑

SK01（第10図） 上段地区中央部に位置する楕円形の土坑である。長軸残存 2.79m、短軸 2.13m、深さ 0.11m を測る。西側の一部を搅乱溝に切られる。検出時、平面形・規模が駿川 D 遺跡で検出された井戸跡に似ていたため、井戸の可能性を踏まえて掘削したが、全体に浅いものであった。後世の削平のため、造構の底付近のみが残存しているものと考えられる。埋土は黒褐色砂質土である。遺物も出土しなかったため、時期、性格をつかむことはできなかった。

SK02（第10図） 上段地区北部に位置するほぼ円形の土坑である。長軸 1.28m、短軸 1.27m、深さ 0.24m を測る。こちらも井戸の可能性を想定したが、浅い土坑であった。SD01 と同様、削平を受けていると考えられる。埋土は黒色砂質土・黒褐色砂質土を基本とする。遺物は出土しなかった。

SK03（第10図） 上段地区南部に位置する楕円形の土坑である。東部約 1/2 を搅乱溝に切られる。長軸 1.06m、短軸残存 0.82m、深さ 0.43m を測る。埋土は黒褐色砂質土・黒色砂質土を基本とする。土師器破片 1 点が出土した。

SK04（第11図） 上段地区西部中ほどに位置する楕円形の土坑である。全体の 3/4 ほどの造構上部を SD01 に切られ、東端部を搅乱溝に切られる。長軸残存 2.56m、短軸 2.14m、深さ 0.51m を測る。埋土は、上位が砂質土主体、下位は植物質を含んだ粘性の土が主体となっており、砂、ラミナを含んだ自然堆積である。深さが地下水位以下まで掘り込まれていることから、井戸の可能性がある。完形の中世土師器皿、中世珠洲焼、板状木製品が出土した。

SK05（第6図） 上段地区北西部に位置する楕円形と推定される土坑である。南半部は搅乱に切られ、西部は調査区外に続く。最大残存長 1.18m、最大検出幅 0.74m、深さ 0.25m を測る。埋土は黒褐色砂質土・黒色砂質土を基本とする。遺物は出土しなかった。

SK06 (第 10 図) 上段地区北西部に位置する楕円形と推定される土坑である。北西側の大部分を擾乱に切られる。最大残存長 0.86m、最大幅 0.6m、深さ 0.23m を測る。埋土は砂質土と砂の互層である。遺物は出土しなかった。

SK07 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する楕円形の土坑である。長軸 0.93m、短軸 0.48m、深さ 0.02 ~ 0.1m を測る。埋土は黒褐色砂質土を主体とする。底面に複数の円形の落ちがあり、凹凸している。杭跡などの小ピットが複数密集したものの可能性もある。土師器小破片 1 点が出土した。

SK08 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する楕円形の土坑である。東部が調査区外に続く。最大長 1.17m、最大残存幅 0.73m、深さ 0.1m を測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。SK07 と同様、底面に凹凸があり、複数のピットの集合の可能性がある。遺物は出土しなかった。

SK09 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する楕円形の土坑である。東部が調査区外に続く。SK12 を切る。最大長 1.33m、最大残存幅 0.43m、深さ 0.21m を測る。埋土は黒褐色系の砂質土・粘質土と砂の互層状で自然堆積とみられる。遺物は出土しなかった。

SK10 (第 12 図) 下段地区中央部に位置する楕円形の土坑である。長軸 1.03m、短軸 0.23m、深さ 0.05m を測る。埋土は黒色粘質土を主体とする。遺物は出土しなかった。

SK12 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する楕円形の土坑である。東部が調査区外に続く。SK09 に切られる。最大長 0.7m、最大残存幅 0.6m、深さ 0.15m を測る。埋土は黒褐色砂質土を主体とする。遺物は出土しなかった。

SK13 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する不整円形の土坑である。SD03 に切られる。長軸 1.18m、短軸 残存 0.65m、深さ 0.17m を測る。埋土は黒褐色砂質土・粘質土を主体とする。遺物は出土しなかった。

ピット

SP03 (第 10 図) 上段地区中央南寄りに位置する。直径 0.24m、深さ 0.08m を測る。埋土は黒色砂質土・褐灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SP04 (第 10 図) 上段地区北西部に位置する。直径 0.21m、深さ 0.03m を測る。西部約 1/3 を擾乱溝に切られる。埋土は褐灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SP05 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する。SD04 を切る。長軸 0.67m、短軸 0.49m、深さ 0.22m を測る。柱痕状の黒褐色粘質土がみられることから杭跡であろう。遺物は出土しなかった。

SP06 (第 12 図) 下段地区北部に位置する。長軸 残存 0.61m、短軸 0.5m、深さ 0.07m を測る。東部を SD04 に切られる。埋土は黒褐色粘質土である。土師器破片 1 点が出土した。

SP07 (第 13 図) 下段地区中央部に位置する。長軸 0.63m、短軸 0.36m、深さ 0.06m を測る。埋土は黒褐色砂質土と黒色砂質土の混じりである。遺物は出土しなかった。

SP08 (第 12 図) 下段地区中央部に位置する。長軸 0.45m、短軸 0.23m、深さ 0.04m を測る。埋土は黒色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SP09 (第 7 図) 上段地区西壁付近中ほどに位置する。最大長 0.6m、最大検出幅 0.18m、深さ 0.1m を測る。SD01 を切る。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。時期は近世以降である。

性格不明遺構

SX02（第13図）下段地区南部に位置する長梢円形の落ち込みである。西側縁部をSD04に切られる。最大長12.5m、最大検出幅1.78m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色砂質土・粘質土を主体とする。遺構の底面は凸凹しており、埋土下位はブロック状の地山砂の塊が多く含まれていた。古代須恵器、中世侏珠焼が出土した。性格は不明だが、耕作に伴うなんらかの掘り込みであろうか。

SX03（第12図）下段地区北端部に位置する大型の円形状の落ち込みである。SD03・SD04・SD06を切っており、調査区外北方向に続いている。北西～南東検出幅7.1m、北東～南西検出幅3.4mを測る。深さは0.8m以上であり、湧水と作業の安全上、遺構の深さを確認できなかった。断面を観察すると、段落ち（SX01）を埋めたてでフラットになった面から落ち込んでおり、旧地形よりも新しい落ち込みであることがわかる。遺物はほとんど無く、埋土最上層付近で近世陶磁器破片2点が出土したのみである。SD01と同時期に機能していたか、最終的には土地改良時までに埋没したとみられる。しかし、下段地区の地山面も、SX03部分で北方向に落ち込んでいくことが確認されるため、旧地形の時代でも同じ位置が落ち込みであったと考えられる。下段地区で検出された細い各溝はSX03に向かって流れていったと考えるのが自然であり、平成15・16年の調査区で検出されたような溜池状遺構の可能性が高いと考える。

第3節 遺物

調査では、古代、中世、近世以降の土器陶磁器類、石製品、木製品など総計245点の遺物が出土した。本書ではそのうち55点を図示した。なお侏珠焼は吉岡康暢氏の7期編年（吉岡1994）に準拠した。暦年代はⅠ期：12世紀後半、Ⅱ期：13世紀前半、Ⅲ期：13世紀中葉～1270年代、Ⅳ期：1280年代～1370年代、Ⅴ期：1380年代～1440年代、Ⅵ期：1450年代～1470年代、Ⅶ期：1480年代～1500年代と推定されている。

遺構出土遺物（第14・15・16図）

古代の土器類

1は須恵器蓋である。天井部は扁平で、口縁は天井部との境に稜をつくり、下方に短く折れる。2は須恵器杯Bである。低い高台が付き、端部が「ハ」の字状に開き踏ん張る。1・2とも8世紀代のものであり、段落ち（SX01）埋土内より出土した。

3～7は須恵器甕である。いずれも体部の小破片で、外面に平行・繩目・格子状のタキ痕、内面に同心円状の当具痕が残る。3はSD01、4～6は段落ち（SX01）埋土内、7はSX02より出土した。

8は土師器碗である。底部に断面三角形の低い高台が付く。内外面とも摩耗が著しく、糸切りなどの調整は確認できない。8世紀後葉～9世紀代に属すると考えられる。段落ち（SX01）埋土内より出土した。

中世の土器・陶磁器類

9～13は土師器皿である。内9～12は非ロクロ成形、13はロクロ成形である。9はほぼ完形で出土した。体部外面に指押さえ痕、口縁端部はやや内湾ぎとなり、口縁外面のヨコナデは1段である。口縁に灯芯による焦げ痕があることから灯明皿として使用されたものであろう。13世紀代である。SK04より出

土。10も同様で、灯明皿であろう。SD01より出土。13世紀代。11・12は口縁が体部より直線的に開く。口縁外面のヨコナデは1段である。段落ち（SX01）埋土内より出土。13は底部のみの小破片で、摩耗が著しく、糸切りなどの調整は明確でない。段落ち（SX01）埋土内より出土した。いずれも13世紀～14世紀代であろう。

14～20は珠洲焼片口鉢である。14は口縁部で断面三角形の口縁を呈し、端部はほぼ水平に面を持つ。SK04より出土。15は底部で8条単位の鉄目をやや乱雑な方向で底部内面にまで施す。底部外面は糸切りをナデ消している。段落ち（SX01）埋土内より出土。14・15は土師質ではあるが、焼成のあまい珠洲焼と判断した。V期か。16は口縁部で礫部がやや肥厚し上端はほぼ水平の面をつくる。III期とみられる。段落ち（SX01）埋土内より出土。17は体部でやや薄手、直線的に開く。III～IV期か。段落ち（SX01）埋土内より出土。18は体部で7条以上の単位の鉄目を施す。SD01より出土。19は体部で5条単位の鉄目を施す。SD01より出土。20は底部で9条単位の鉄目を密に施す。底部は糸切り後に板状工具でナデを行っている。SK04より出土した。いずれもIII～IV期におさまるものと考える。

21～29は珠洲焼甕である。21は口縁がコの字状に外反し、端部はやや尖り気味で丸い。III期。段落ち（SX01）埋土内より出土。22は口縁が外反～下傾し、端部は丸い。III期。段落ち（SX01）埋土内とSD01より出土した破片が接合した。23は口縁がコの字状に外反し、端部はやや尖り気味で丸いが頸部全体は短い。III期。SD01より出土。24は口縁がくの字状に外反し、端部はややつぶれたように丸い。III～IV期。SD01より出土。25は口縁がくの字状に外反し、端部は丸い。III～IV期。段落ち（SX01）埋土内より出土。26は口縁が方形で端部に面を持つ。III～IV期。段落ち（SX01）埋土内より出土。27・28は体部である。外面のタタキは頸部と肩部の境より施している。27は段落ち（SX01）埋土内より出土。28はSD01とSK04より出土した破片が接合した。29は底部である。外面のタタキは縦方向の斜め方向で施している。底部は砂底である。段落ち（SX01）埋土内とSD01より出土した破片が接合した。いずれもIII～IV期におさまるものと考える。

30は青磁碗である。口縁は直線的に開き、端部は丸く収める。外面に陰刻により簡略化した蓮弁文を施している。龍泉窯系IV類（14世紀代）とみられる。段落ち（SX01）埋土内より出土した。

近世以降の陶磁器類

31は瀬戸美濃焼丸碗である。丸みを帯びた体部下半で外面をヘラ削りする。灰釉を施す。32は瀬戸美濃焼筒形椀である。下膨れの体部に低い高台が付く。天目釉を施す。いずれも17世紀代か。33は瀬戸美濃焼の筒形香炉とみられる。口径5.4cm、器高4.45cmの小型品で、三足の脚が付くものと思われる。外面～口縁内面上部に灰釉を施す。16世紀以降とみられる。34～37は越中瀬戸焼壺である。口径7～8cm、低径8cm前後の小型品で、短い頸部を持ち口縁端部は丸く収める。底部は回転糸切りである。鉄釉を施す。いずれも17世紀代か。38は肥前系陶器碗である。にぶい橙色の胎土に、長石を含む灰白色の釉を施す。16世紀末～17世紀前半とみられる。39は越前焼壺である。16世紀代か。40は肥前系磁器皿である。釉が青白色を呈す口縁小破片で、口縁端部がやや外反する。17世紀以降。41は肥前系磁器染付皿である。見込みに五弁花文を描く。17世紀末～18世紀とみられる。31～34・36・38～40は段落ち（SX01）埋土内より出土、37・41はSD01より出土、35はSX03より出土した。

木製品

54は板状の木製品である。幅約3cm、厚さ約0.5cmの木札状を呈するが、欠損部が多いため詳細は不明である。SK04より出土した。

表土・搅乱出土遺物（第14図）

42～44は古代須恵器甌である。いずれも体部の小破片で、外面に平行・繩目・格子状のタタキ痕、カキ目、内面に同心円状の当具痕が残る。

47は中世土師器皿である。ロクロ成形。摩耗が著しく、糸切りなどの調整は明確でない。

45・46は珠洲焼片口鉢である。45は体部で6条以上の単位の鉄目を施す。46は底部で、板状工具でナデている。小破片のため詳細な時期は特定できない。

48は青磁碗である。口縁はやや外反して開き、外面に簾蓮弁文を陽刻する。龍泉窯系II b類（13世紀前半）である。

49は瀬戸美濃焼皿である。三角形の低い貼り付け高台で、灰釉を施す。

50は越中瀬戸焼皿である。三角形の低い貼り付け高台で、鉄釉を施す。

51は肥前系磁器染付小杯である。18世紀ごろか。

52は肥前系磁器染付皿である。見込みに松を描き、底部は蛇ノ目凹形高台である。18世紀後半～19世紀前半のものである。

53は砥石である。2面に使用痕のある小破片である。

55は木製椀である。器壁が厚めで、高台は低い。塗りは認められず無垢の椀とみられる。時期は不明である。

第4章　まとめ

今回の調査で得られた知見を整理しまとめにかえたい。

鞍川地区では、平成15年～16年に行われた一般国道415号線（鞍川バイパス）建設に伴う発掘調査で、鞍川中A遺跡では中世の流路、近年までの旧河道、湿地帯、鞍川中B遺跡では弥生時代中期の流路、中世～近世の溜池状遺構が検出され、鞍川D遺跡では、丸木舟を井戸枠に転用した中世の大型井戸、流路、溝など中世の集落の存在を裏付ける遺構が確認されており、弥生時代から近現代まで当地で人々が生活していた歴史の一端が明らかになった。

今回の調査では弥生時代の遺構・遺物は確認できなかった。古代に属する遺物は須恵器などが確認されたが、非常に少量であり、後世の流路や耕地造成時の整地土に混入したものであった。

確実に遺構が確認できるのは中世からと考えられる。しかし前述したように中世の生活面は、後世の耕作地形成や土地改良のためにかなりの規模で削平されていて、遺構の残りは悪い状況であった。そのことは、各遺構から遺物がほとんど出土しなかったことと、調査で出土した遺物の大半が近世以降の流路SD01と、旧耕作地の段落ち(SX01)の埋土から出土したもので占められている事実からも窺えるのである。

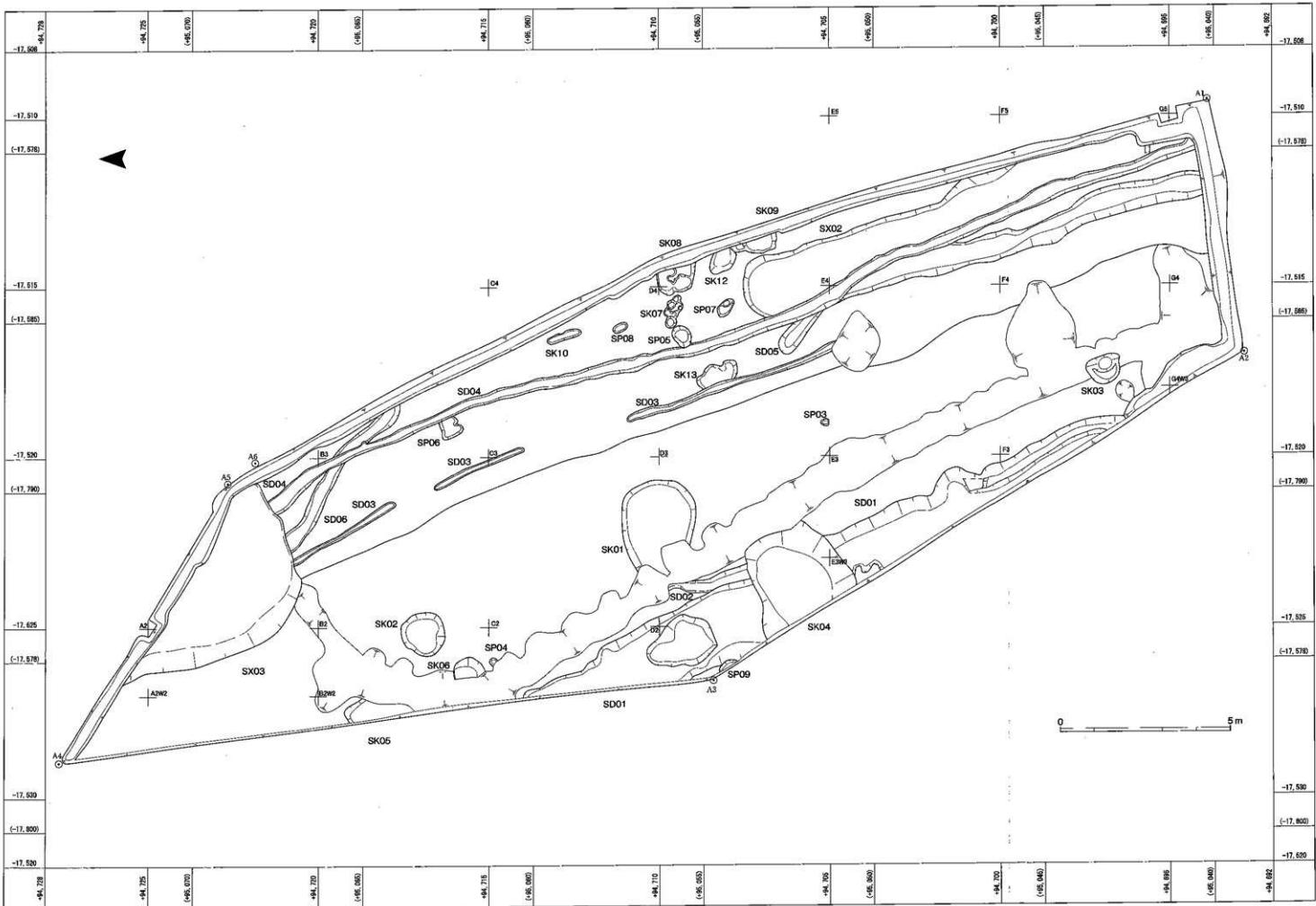
このような状況で、中世ととらえたこれらの遺構の正確な時期を決定するのは慎重とならざるをえないが、唯一時期の推定できるSK04の出土遺物と、全体の出土遺物のうち最も多くを占める中世の土器は、概ね13世紀～14世紀代と時期的にまとまっている。当地周辺に13世紀～14世紀代の集落が営まれていたことが推定される。この時期は、当地周辺に平安時代後期に成立したとされる荘園「阿努荘」^{あぬのしょう}が安定した営みを行っていた時期にある。今回の調査ではこの時期の遺構については残りが悪く、性格の判明するものは無かったが、隣接する遺跡にみられるような、井戸や流路・溝、溜池といった遺構が展開していたと思われる。

近世に入るとさらに水田開発が活発となり、当調査区でも中世の遺構を削って耕作地開発を行っている。調査区では旧耕作地の段と流路、溜池状の落ち込みを確認した。旧耕作地は東側に低くなる階段状になっていたことがわかる。さらに昭和30年代の土地改良時までに耕作地の段SX01を埋め、流路SD01、落ち込みSX03も埋没したと考えられる。SD01とSX01から出土した珠洲焼が接合した事例が2例みられたことから、調査区の上段地区を削ってその土を使い下段地区を埋め立てフラットな地形を造り、ほぼ現在の水田規模の耕作地を整備したのであろう。

今回の調査は調査範囲が狭く、搅乱や遺構の削平など多かったため、遺跡の性格について積極的に論ずるには十分な情報を得られなかつたが、当鞍川地区的集落形成に関わる歴史の流れを理解する上でひとつ貴重な資料を提供することができたと考える。

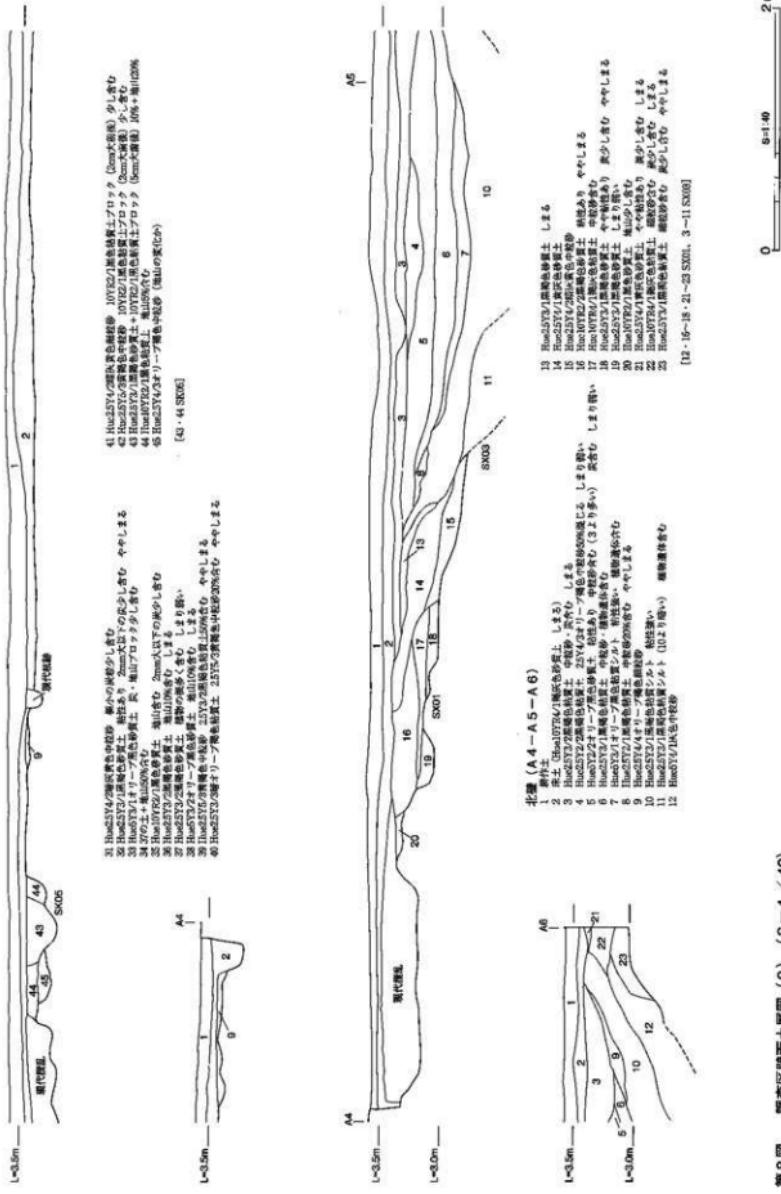
引用・参考文献

- 九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成II』
- 古代の土器研究会編 1994『古代の土器3 都城の土器集成III』
- 児島清文 1962『水見市地名考』水見報知新聞社
- 瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史 陶磁史篇四』
- 大宰府市教育委員会 2000『大宰府糸坊跡XV－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財第49集
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真福社
- 富山県文化振興財団 1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告I－』
- 埋蔵文化財発掘調査報告第5集
- 富山県文化振興財団 1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II－』
- 埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 水見市 1999『水見市史』9資料編7自然環境
- 水見市 2000『水見市史』6資料編4民俗・神社・寺院
- 水見市 2002『水見市史』7資料編5考古
- 水見市 2006『水見市史』1通史編1古代・中世・近世
- 水見市教育委員会 2005『鞍川中A遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告I』水見市埋蔵文化財調査報告第41冊
- 水見市教育委員会 2006『鞍川D遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告II』水見市埋蔵文化財調査報告第44冊
- 水見市教育委員会 2006『鞍川中B遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告III』水見市埋蔵文化財調査報告第45冊
- 水見市教育委員会 2010『金沢医科大学水見市民病院事業に伴う試掘調査概要』水見市埋蔵文化財調査報告第55冊
- 水見市立博物館 2006『特別展 水辺の人々－布勢水海の歴史をさぐる－』
- 水見市立博物館 2006『特別展 竹里山の謎にせまる－山城・寺院・鞍河氏－』
- 北陸中世土器研究会編 1997『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房
- 古岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

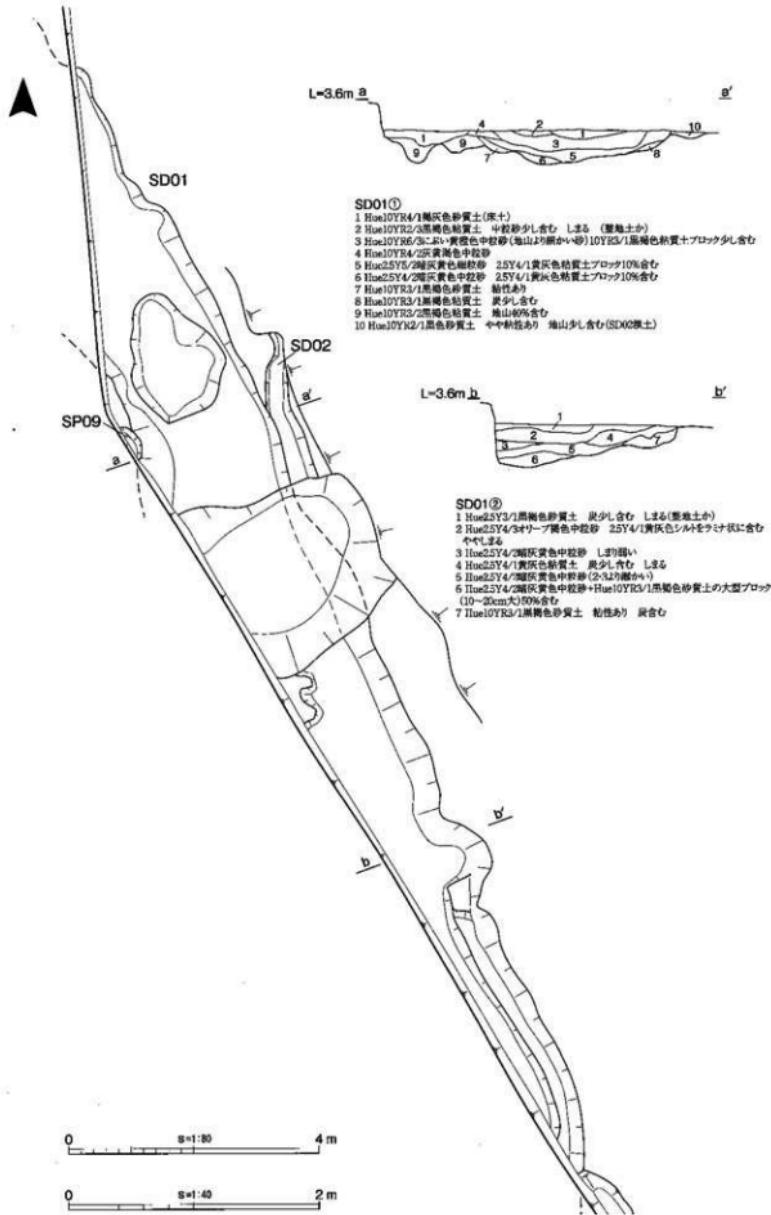


第6図 調査区全体図(S=1/100)

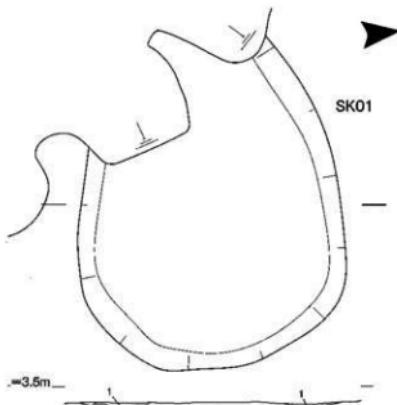
座標系第VII系 () で表している座標値は日本測地系



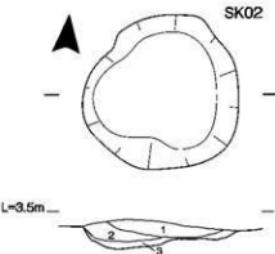
調査区壁面土層図(2) (S=1/40)



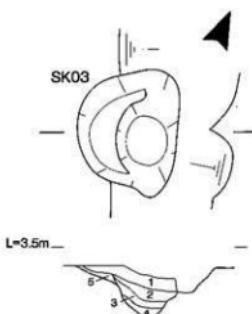
第9図 道橋実測図 (1) SD01・SD02 (平面図 S = 1 / 80, 断面図 S = 1 / 40)



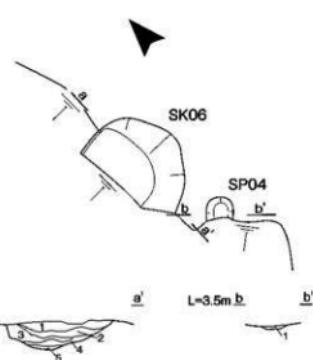
SK01
1 Huel10YR2/1黒褐色砂質土・軽粘土・しる
2 Huel10YR3/1黒褐色砂質土・中粘土・しる
3 Huel25Y5/1黒褐色砂質土・中粘土・しる
4 Huel25Y2/1黒褐色砂質土・軽粘土・しる
5 Huel25Y2/1黒褐色砂質土・堆山20%含む



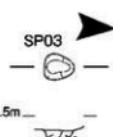
SK02
1 Huel10YR2/1黒褐色砂質土・しる
2 Huel10YR3/1黒褐色砂質土と10YR5/3C-E・青褐色中粒砂が互層状となる・ややしる
3 Huel10YR2/1黒褐色砂質土+10YR5/4黄褐色中粒砂(堆山)=
10YR4/4褐色中粒砂・ややしる



SK03
1 Huel10YR2/1黒褐色砂質土・軽粘土・しる
2 Huel10YR3/1黒褐色砂質土・中粘土・しる
3 Huel25Y5/1黒褐色砂質土・中粘土・しる
4 Huel25Y2/1黒褐色砂質土・軽粘土・しる
5 Huel25Y2/1黒褐色砂質土・堆山20%含む



L=3.5m a a' L=3.5m b b'



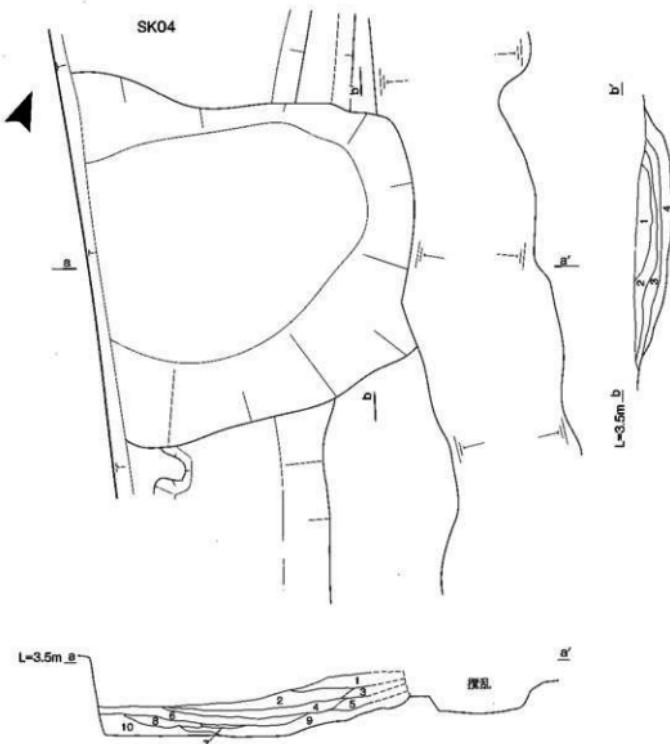
SP03
1 Huel10YR2/1黒褐色砂質土・堆山20%混じる・ややしる
2 Huel10YR4/1黒褐色砂質土・泥少しある・しり固い

SK06
1 Huel10YR2/1黒褐色砂質土+10YR6/1黒灰色砂質土・しる
2 Huel25Y5/1黒褐色中粒砂・L=20cm
3 Huel10YR2/1黒褐色砂質土+10YR3/3暗褐色中粒砂・L=2cm
4 Huel10YR2/2黒褐色砂質土・L=2cm
5 Huel10YR4/4黒褐色砂質土と堆山の物が互層状となる

SP04
1 Huel10YR4/1黒灰色砂質土・堆山少し含む・しり固い

0 1 2 m
B=1:40

第10図 遺構実測図(2) SK01・SK02・SK03・SK06・SP03・SP04 (S = 1 / 40)



SK04 (a-a')

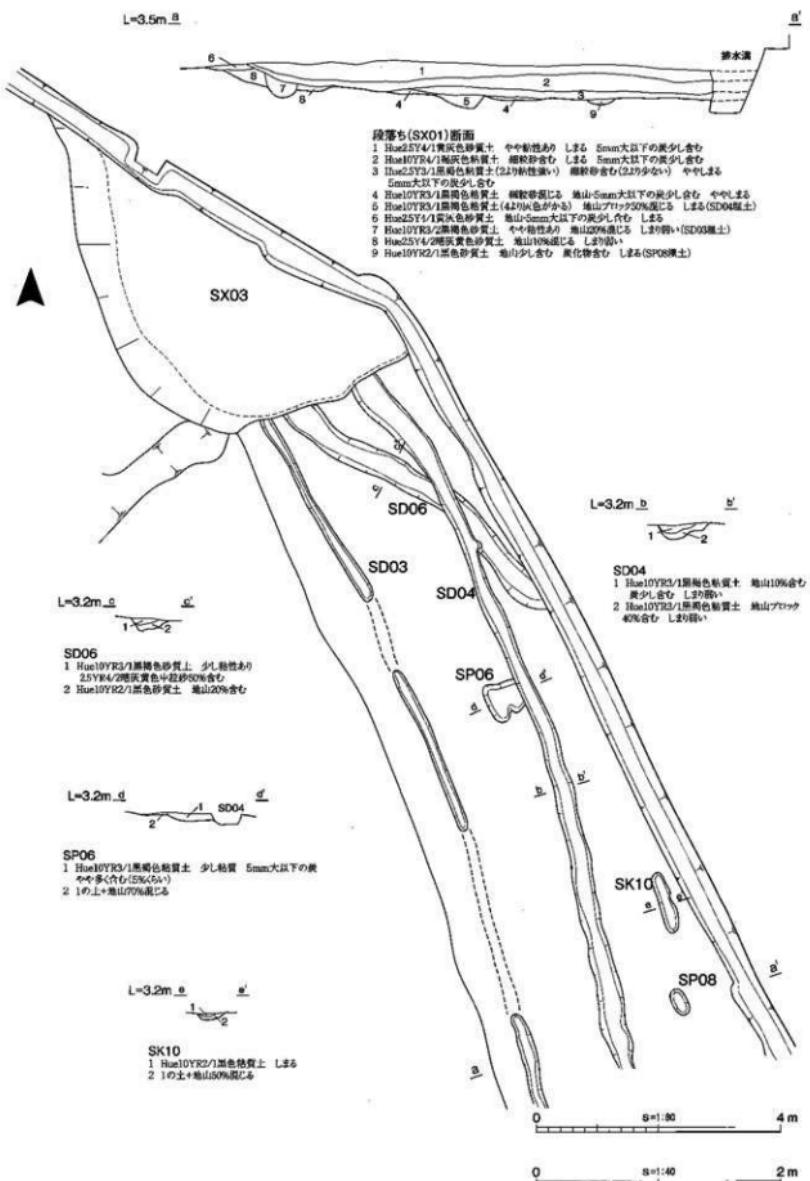
- 1 Hse10YR3/1 黒褐色砂質土 5mm人以下の表少し含む 10YR4/1 黒褐色熱質土ブロック20%含む しまる
- 2 Hse25Y5/3 黄褐色中粒砂 10YR2/4 黄褐色砂質土5%含む
- 3 Hse10YR2/6 黑褐色砂質土 やや粘性あり 2mm大以下の表少し含む 10YR4/1 黒褐色熱質土ブロック10%含む L26
- 4 Hse10YR2/7 黑褐色砂質土 やや粘性あり 2mm大以下の表少し含む 10YR4/1 黒褐色熱質土ブロック10%含む
- 5 Hse10YR3/1 黑褐色砂質土 2mm大以下の表少し含む しのやや固い
- 6 Hse10YR1/7 黑褐色粘質土 粘性強い
- 7 Hse25Y3/1 黄褐色粘質土 粘性強い 中粒砂少しある
- 8 Hse25Y3/2 黑褐色粘質土 中粒砂少しある
- 9 Hse10YR3/2 黄褐色砂質土 10YR4/3-4-E 黄褐色中粒砂をラミナ状に含む 地山少しある しめ固い
- 10 Hse25Y3/2 黄褐色砂質土 やや粘性あり 表少しある

SK04 (b-b')

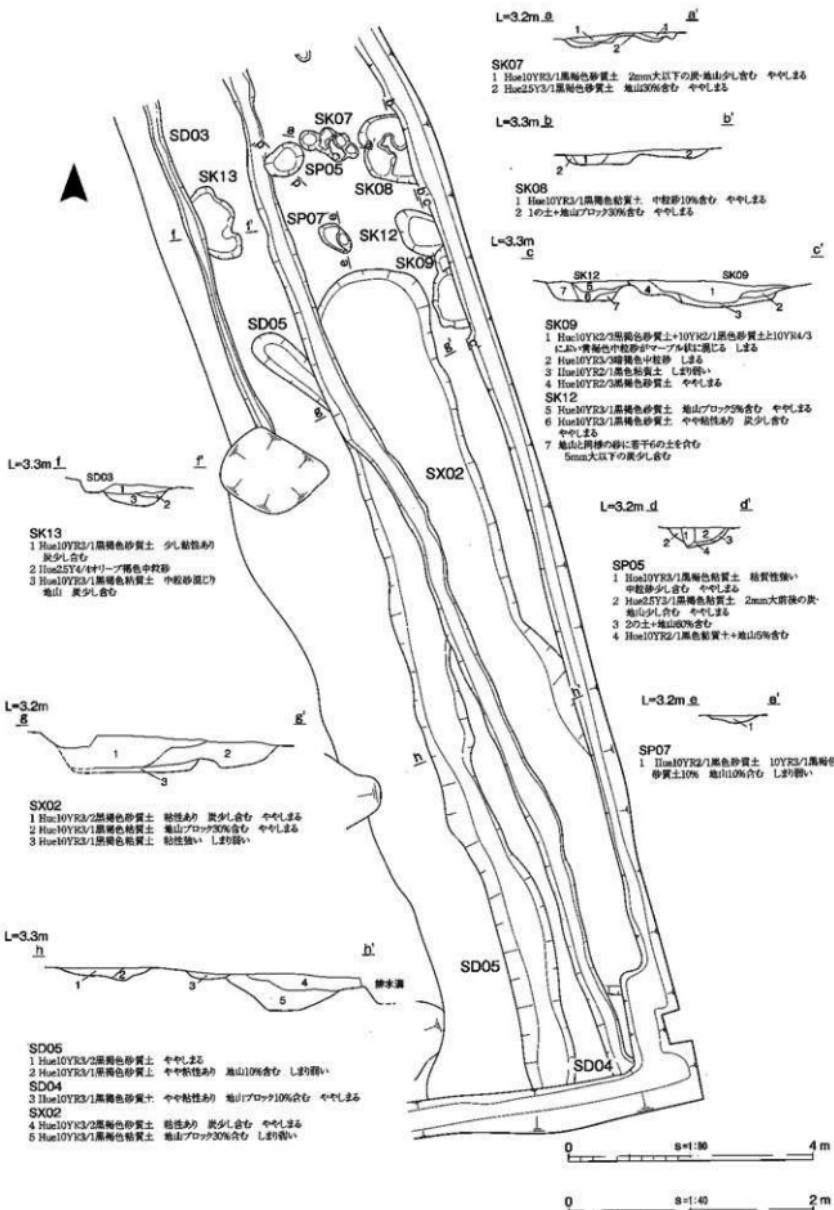
- 1 Hse10YR3/1 黑褐色砂質土 5mm人以下の表少し含む 10YR4/1 黑褐色熱質土ブロック20%含む しまる
- 2 Hse10YR2/2 黄褐色砂質土 やや粘性あり 2mm大以下の表少し含む 10YR4/1 黑褐色粘質土ブロック10%含む L26
- 3 Hse10YR3/1 黑褐色砂質土 2mm大以下の表少し含む L25やや固い
- 4 Hse10YR3/2 黄褐色砂質土 10YR4/3-4-E 黄褐色中粒砂をラミナ状に含む 地山少しある しめ固い

0 S=1:40 2 m

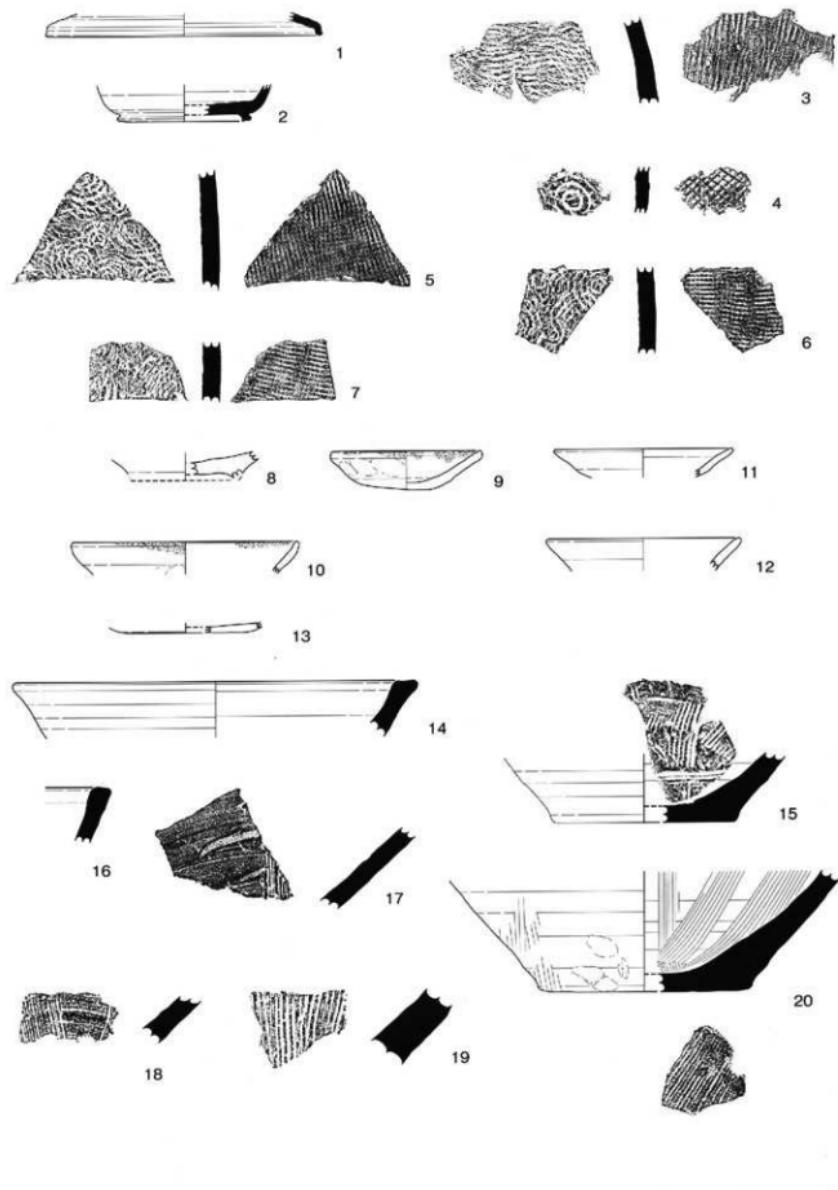
第 11 図 造構実測図 (3) SK04 (S = 1 / 40)



第12図 遺構実測図(4)下段地区遺構①(平面図S=1/80, 断面図S=1/40)

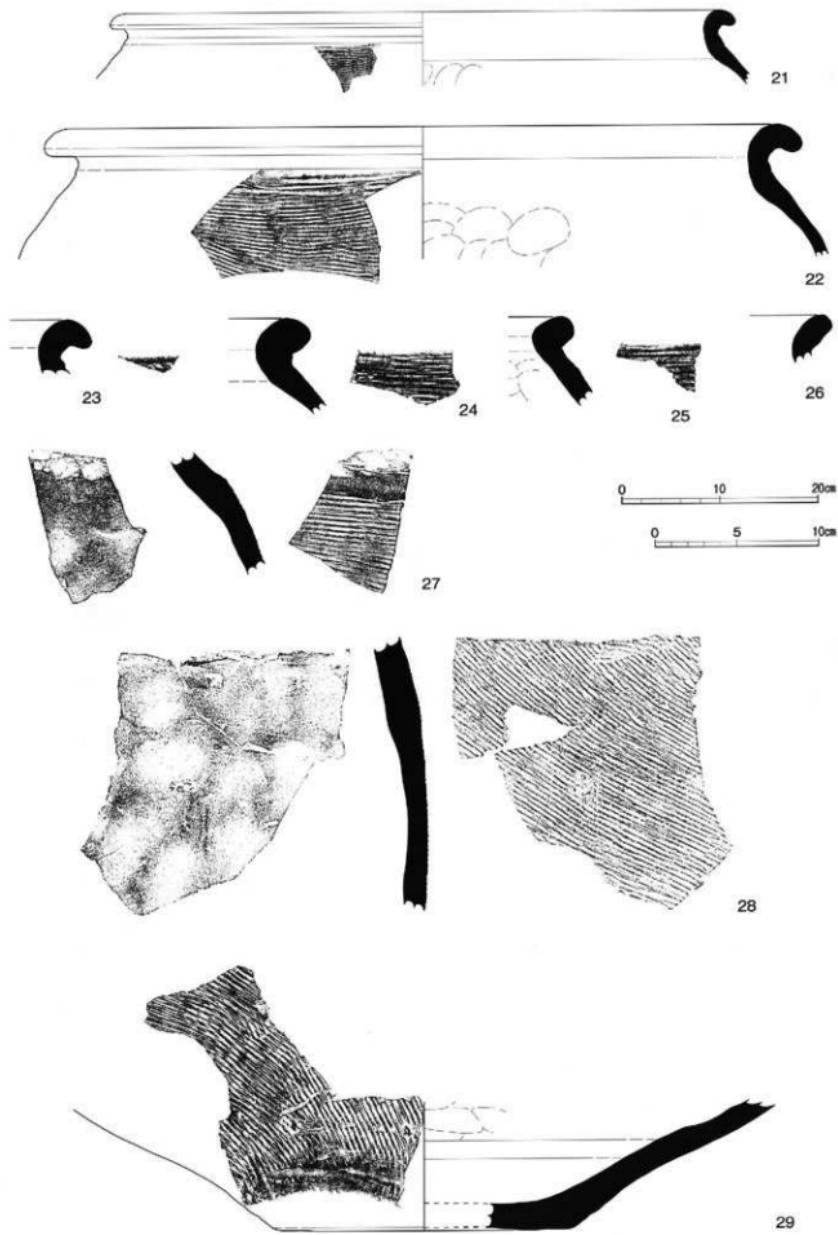


第13図 道構実測図(5) 下段地区道構②(平面図S=1/80, 断面図S=1/40)

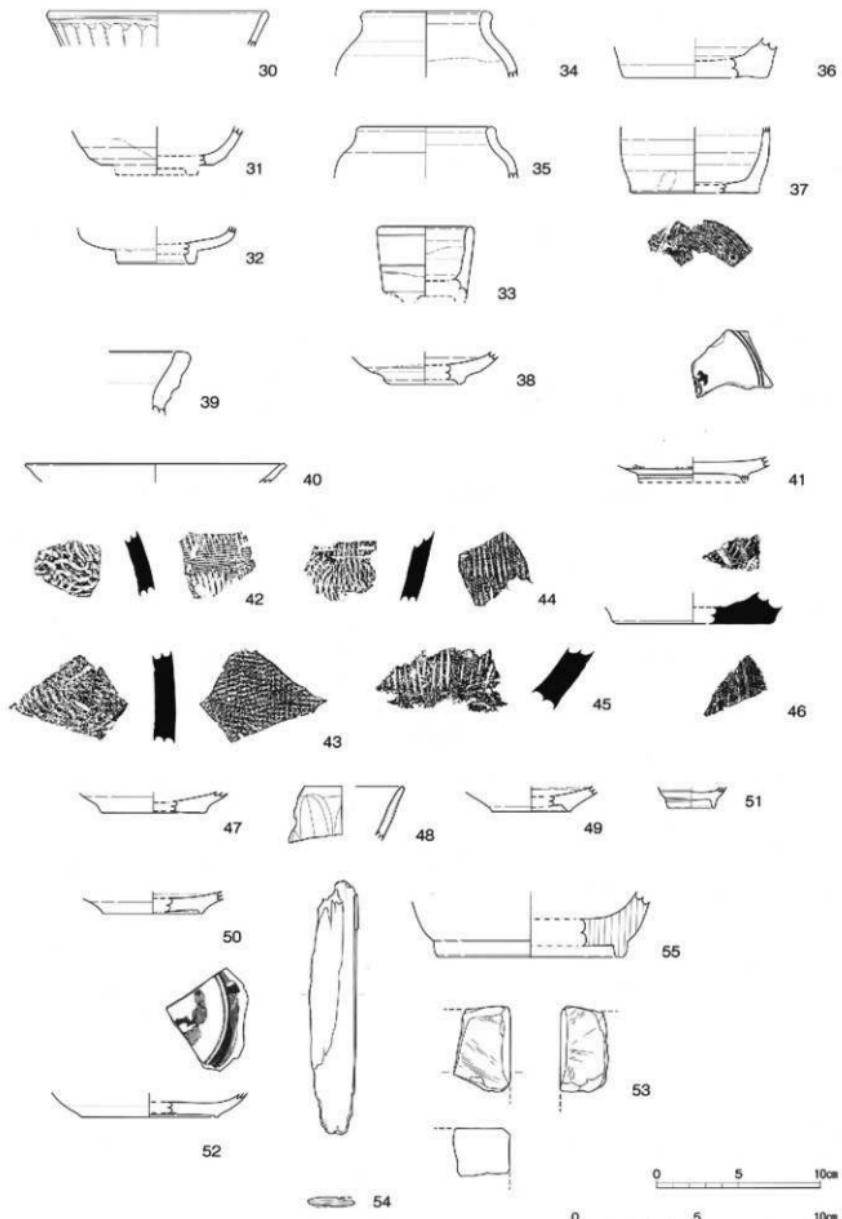


第14図 遺物実測図 (1) 遺構出土遺物 (須恵器・土師器・珠洲焼) (S = 1 / 3)

0 5 10cm



第15図 遺物実測図（2）遺構出土遺物（珠洲焼）（21はS=1／5 22～29はS=1／3）



第16図 遺物実測図（3）遺構出土遺物（青磁・その他陶磁器類）・表土・攪乱出土遺物・木製品・石製品

(30～52, 54, 55はS=1/3 53はS=1/2)

第2表 遺物計測・観察表

番号	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	色調	残存率	地区	遺構	層位	特徴	
			口径	器高	底径									
1	須恵器	盃	16.70	14.0	-	善	良好	灰色	LJ縁1/8	C3	SX01	上層	口縁下方に短く折れる。	
2	須恵器	杯B	-	残存 2.25	7.20	善	良好	灰色	底部1/6	F3	SX01	下層	高台低く、ややふんばる。	
3	須恵器	甕	-	残存 5.30	-	やや密 良好	灰白色	体部小片	R2	SD01	上層	外曲平行タタキ、内面青海波文。		
4	須恵器	甕	-	残存 2.80	-	善	良好	灰白色	体部小片	D3	SX01	上層	外曲平行タタキ、内面青海波文。	
5	須恵器	甕	-	残存 7.40	-	善	良好	灰白色	体部小片	H4	SX01	下層	外曲平行タタキ、内面青海波文。	
6	須恵器	甕	-	残存 5.30	-	善	良好	灰白色	体部小片	E3	SX01	下層	外曲平行タタキ、内面青海波文。	
7	須恵器	甕	-	残存 3.65	-	善	良好	灰色	体部小片	G4	SX02	堆土	外曲平行タタキ、内面青海波文。	
8	土師器	瓶	-	残存 1.60	-	善	良好	橙色	底部1/3 (高台欠損)	C3・E4	SX01	下層	低い三角形の高台が付く。	
9	土師器	瓶	9.00	2.40	9.00	密	良好	にぶい黃褐色	はす穴(口縁1/10欠)		SK04	堆土	非クロ成形、灯芯油痕あり。	
10	土師器	瓶	13.70	2.00	-	密	良好	にぶい黃褐色	口縁1/10	E2	SD01	下層	非クロ成形、灯芯油痕あり。	
11	土師器	瓶	10.80	1.75	-	密	良好	オリーブ褐色	LJ縁1/10 以下	C3	SX01	下層	非クロ成形、口縁は直線的に開き、端部は丸く取る。	
12	土師器	瓶	11.70	1.80	-	密	良好	にぶい橙色	口縁1/10	F3	SX01	下層	非クロ成形、口縁は直線的に開き、端部は丸い。ヨコナデ1段。	
13	土師器	瓶	-	残存 0.60	7.00	密	良好	橙色	底部1/6	B2	SX01	下層	クロロ成形。	
14	珠洲燒	片口鉢	24.40	3.45	-	粗	やや 良好	灰黄色	口縁1/8	E2	SK04	6層	体部はやや内側して開き、口縁は三角形、端部は水平に面をもつ。	
15	珠洲燒	片口鉢	-	残存 4.20	10.70	やや密 良好	灰黄色	底部1/3	F3	SX01	下層	底部糸切をナメ消す。鉢目単位8条。		
16	珠洲燒	片口鉢	-	残存 3.40	-	やや粗 良好	暗褐色	口縁1/10 以下	E4	SX01	下層	口縁端部や把柄し、土壠は水平。		
17	珠洲燒	片口鉢	-	残存 4.90	-	密	良好	灰色	体部小片	E3	SX01	下層	体部が直線的に開く。	
18	珠洲燒	片口鉢	-	残存 2.80	-	やや密 良好	灰色	体部小片	E1	SD01	下層	鉢目単位7条以上。		
19	珠洲燒	片口鉢	-	残存 4.60	-	やや密 良好	灰色	体部小片	D1	SD01	下層	鉢目単位5条。		
20	珠洲燒	片口鉢	-	残存 7.40	13.20	密	良好	灰色	底部1/5		SK04	6層	鉢目単位9条	
21	珠洲燒	甕	60.20	7.60	-	密	良好	灰色	口縁1/8	G4	SX01	下層	口縁コの字状に外反し、端部や下傾し、や尖り気味に丸い。	
22	珠洲燒	甕	43.60	8.15	-	やや密 良好	灰色	口縁1/10	E3・E2 SD01			下層	口縁つまみ出し、下傾させる。端部丸い。	
23	珠洲燒	甕	-	残存 3.30	-	密	良好	灰色	口縁1/10 以下	D1	SD01	下層	口縁コの字状に外反し、端部や下傾し、や尖り気味に丸い。	
24	珠洲燒	甕	-	残存 5.85	-	密	良好	灰色 (削側)	口縁1/10 以下	G2	SD01	上層	口縁コの字に外反し、端部がややぶれたようになら。	
25	珠洲燒	甕	-	残存 5.45	-	密	良好	灰色	口縁1/10 以下	C2	SX01	下層	口縁コの字に外反し、端部は丸い。	
26	珠洲燒	甕	-	残存 2.90	-	密	良好	灰色	口縁1/10 以下	E3	SX01	下層	口縁方形、端部に面を持つ。	
27	珠洲燒	甕	-	残存 7.45	-	密	良好	灰色	眉部小片	F4	SX01	下層	眉部と肩部の塊に段あり。	
28	珠洲燒	甕	-	残存 16.80	-	密	良好	灰色	体部破片	D1	SD01・ SK04	下層・ 6層	口縁方形、端部に面を持つ。	
29	珠洲燒	甕	-	残存 7.90	18.60	密	良好	灰色	底部1/4	D3・F2 SD01		下層・ 砂層	平底で体部大きく圓く。	
30	青磁	瓶	13.20	2.20	-	密	良好	(釉) 緑灰色 (胎) 灰色	口縁1/8	E4	SX01	下層	外面に蓮弁文を施刻する。	

番号	種別	器種	法面 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	地区	遺構	層位	特徴
			口径	器高	底径								
31	窓戸 美濃	丸鉢	—	残存 2.45	6.00	密	良好	(和) オリーブ灰色 (胎土) 灰白色	底部付近 1/8	C3	SX01	上層	灰釉。
32	窓戸 美濃	縁切鉢	—	残存 2.30	4.50	密	良好	(和) 黄色 (胎土) 灰色	底部 1/5	E4	SX01	下層	削出台面。大目移。
33	窓戸 美濃	葉型青 炉	5.40	残存 4.45	—	やや粗	良好	(和) オリーブ黄色 (胎土) 灰白色	口縁 1/4	E4	SX01	上層	灰釉。三足の跡が付くものか?
34	窓中 窓戸	小豆	7.00	残存 4.10	—	やや粗	良好	(和) 灰赤褐色 (胎土) 浅黄色	口縁 1/6	E3	SX01	上層	口縁鋸ぐ直口で、端部は丸く収める。
35	窓中 窓戸	小豆	8.00	残存 3.15	—	やや粗	良好	(和) 褐色 (胎土) ぶい黄色	口縁 1/10 以下	B2	SX03	上層	口縁鋸ぐ直口で、端部は丸く収める。
36	窓中 窓戸	壺	—	残存 2.45	8.90	やや粗	良好	(和) 黒褐色 (胎土) 灰白色	底部 1/4	A1	SX01	上層	圓軸糸切底。
37	窓中 窓戸	壺	—	残存 4.10	8.00	やや粗	良好	(和) 喜慶色 (胎土) ぶい黄褐色	底部 1/3	R1	SD01	垂地土・ 表土	圓軸糸切底。
38	肥前 陶器	壺	—	残存 2.00	4.10	密	良好	(和) 灰白色 (胎土) ぶい褐色	底部 1/3	E3	SX01	下層	低い削出高台、表土を褐色に下塗り後長石粒をかける。
39	越前焼	壺	—	残存 3.90	—	密	良好	(和) 喜慶色 (胎土) 灰色	口縁 1/10 以下	D3	SX01	下層	頭部から外反し、腹部でやや内湾気味となり、側面は四角い。口縁下に前面三角形の突帯が2条めぐる。
40	肥前 陶器	壺	15.70	残存 1.15	—	密	良好	(和) 背白色 (胎土) 白色	口縁 1/10	B2	SX01	下層	口縁端部をやや外反し、尖る。
41	肥前 陶器	壺	—	残存 1.45	—	密	良好	灰白色	底部 1/6	I1	SD01	垂地土	見込み五井花文。
42	須恵器	壺	—	残存 4.00	—	密	やや 不良	(和) 灰色 (胎土) ぶい黄褐色	底部小片	E2	雜乱	表土	外面平行タタキ・カキ目、内面青海波文。
43	須恵器	壺	—	残存 4.65	—	密	良好	灰白色	底部小片	E2		表土	外面平行タタキ・内面青海波文。
44	須恵器	壺	—	残存 4.50	—	密	やや 良好	灰白色	底部小片	F3		表土	外向繩目タタキ・内面青海波文。
45	須洞焼	片口鉢	—	残存 3.75	—	やや粗	良好	灰色	底部小片	F3		表土	御印単位 6条以上。
46	須洞焼	片口鉢	—	残存 1.90	9.40	密	良好	灰色	底部 1/10	C2		表土	底部を板ナデ。
47	土器器	壺	—	残存 1.20	6.20	密	良好	橙色	底部 1/4	R3		表土	ロクロ成形。
48	吉備	壺	—	残存 3.35	—	密	良好	(和) 灰オリーブ色 (胎土) 灰白色	口縁 1/10 以下	D3		表土	外裏飾蓮介文隠窓。
49	窓口 美濃	壺	—	残存 1.20	4.80	密	良好	(和) 灰オリーブ色 (胎土) 灰褐色	底部 1/3	D3		表土	灰釉、三角形の低い貼付高台。
50	窓中 窓口	壺	—	残存 0.85	6.00	密	良好	(和) 黑褐色 (胎土) ぶい褐色	底部 1/3	D2		表土	鐵輪、三角形の低い貼付高台。
51	肥前 陶器	小杯	—	残存 1.30	2.80	密	良好	(和) 透明・白色 (胎土) 白色	底部完存	C1		表土	高台に鄰れ移、重ね焼痕あり。
52	肥前 陶器	壺	—	残存 1.50	8.20	密	良好	(和) 透明・白色 (胎土) 白色	底部 1/4	G3		表土	「松」象付。乾ノ目四形高台。
53	石製品	硯石	豊大良 35	最大幅 2.3	1.95						推乱 1	雜乱	2面使用。
54	木製品	板材	豊大良 15.55	最大幅 2.9	0.55						SE04	表土	
55	木製品	壺	—	残存 4.00	—				底部 1/8	E2	様亂 3	表土	

写 真 図 版



図版 1 遺跡周辺空中写真 白丸が鞍川中B遺跡の位置
米軍撮影の空中写真（1947年撮影）



図版2 遺跡周辺空中写真 白丸が鞍川中B遺跡の位置

国土地理院撮影の空中写真（1963年撮影）



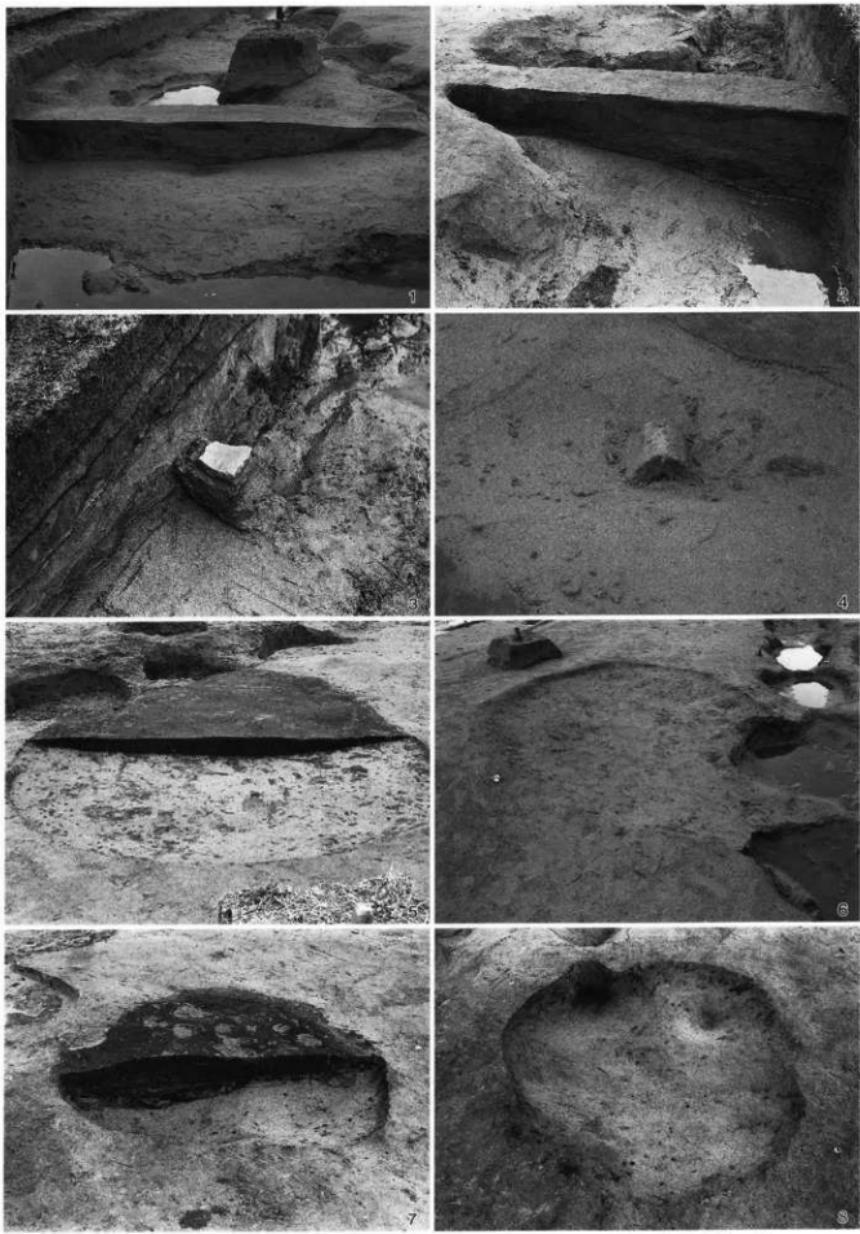
図版3 1. 調査区遠景（北から） 2. 調査区遠景（南東から）



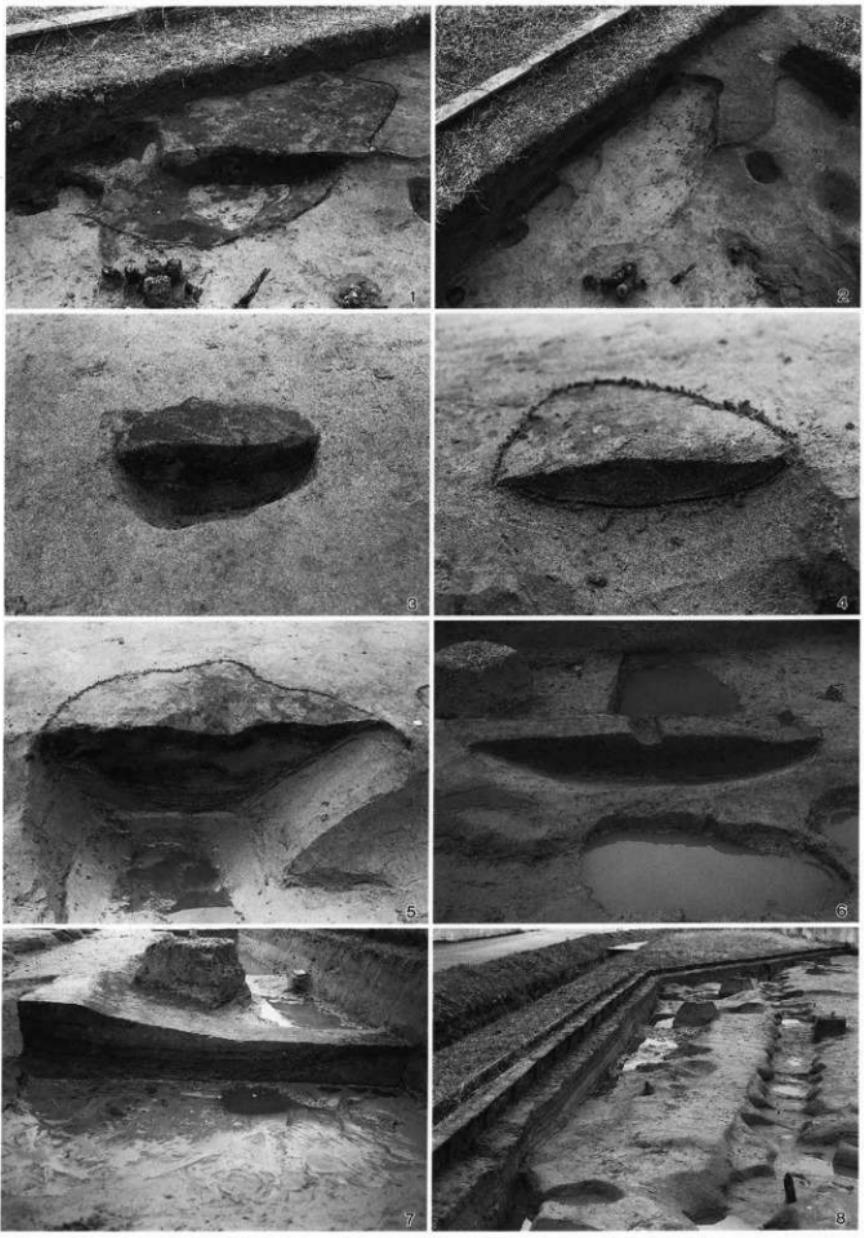
図版4 1. 調査区全景（垂直） 2. 調査区全景（南から）



図版5 1. 調査前（北西から） 2. 調査区土層断面（東から） 3. 調査区土層断面（東から）
4. 調査区土層断面（北から） 5. 調査区検出状況（南東から） 6. 調査区検出状況（北から）
7. SK01・SD02 検出状況（南から） 8. SK02・SK06 検出状況（北から）



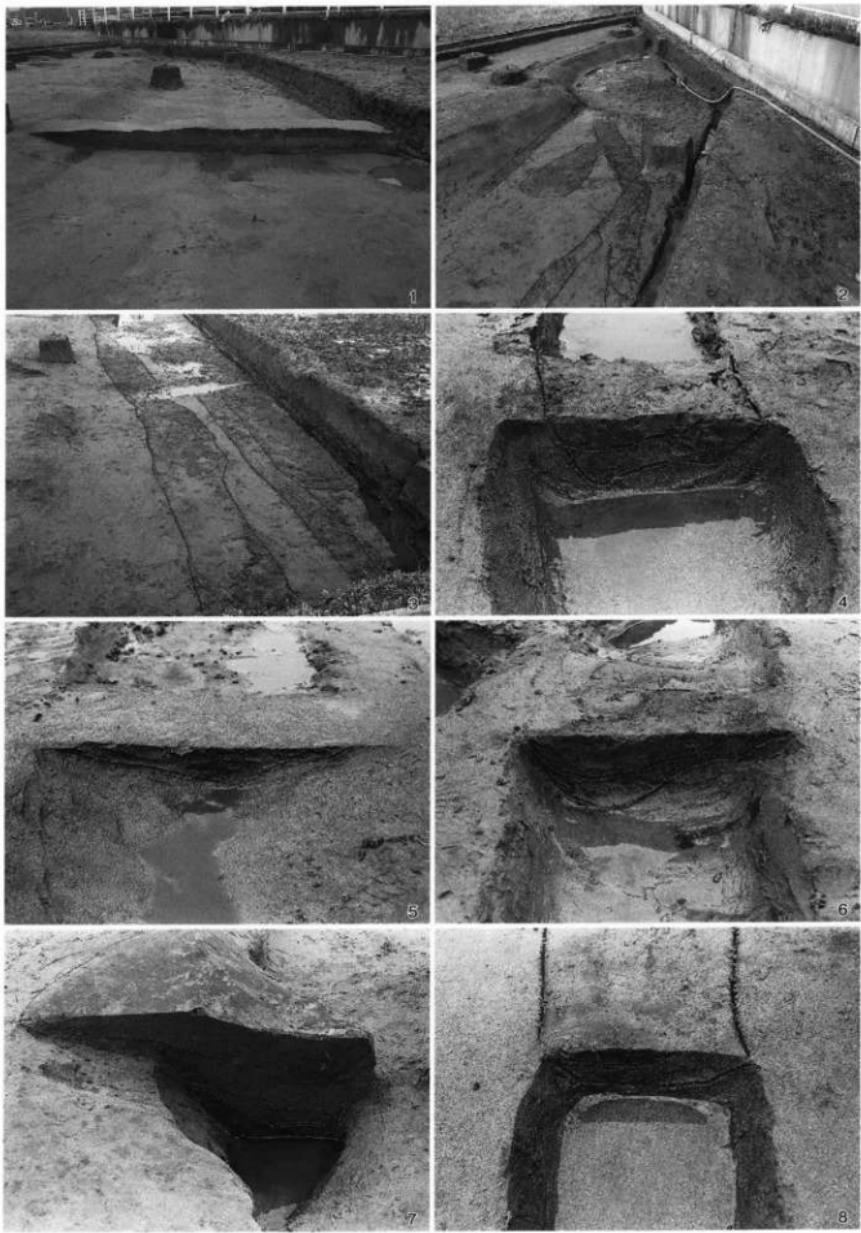
図版6 1. SD01 土層断面①（南から） 2. SD01 土層断面②（北から） 3. SD01 遺物出土状況（南東から）
4. SD01 遺物出土状況（北東から） 5. SK01 土層断面（東から） 6. SK01 完掘状況（北西から）
7. SK02 土層断面（南から） 8. SK02 完掘状況（南東から）



図版7 1. SK05検出状況 (南東から) 2. SK05完掘状況 (南東から) 3. SP03土層断面 (東から)

4. SP04土層断面 (南西から) 5. SK06土層断面 (西から) 6. SK04南北土層断面 (東から)

7. SK04東西土層断面 (北から) 8. SD01上段地区遺構完掘状況 (南から)



図版 8 1. 段落ち (SX01) 土層断面 (南から) 2. 下段地区北部遺構検出状況 (南東から)
3. 下段地区南部遺構検出状況 (南から) 4. SD04 土層断面 (南から) 5. SD05 土層断面 (南から)
6. SD06 土層断面 (北西から) 7. SK03 土層断面 (南から) 8. SK10 土層断面 (南から)



1



2



3



4



5



6

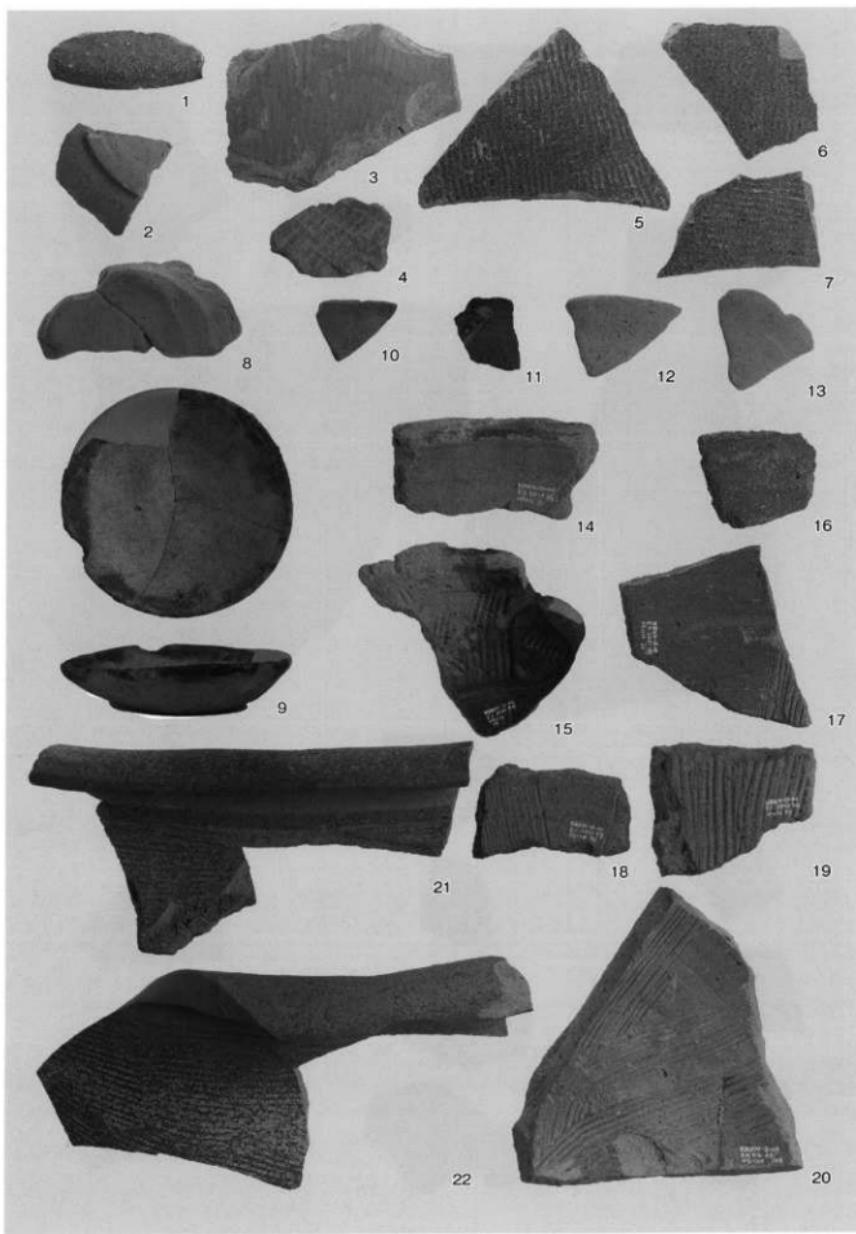


7

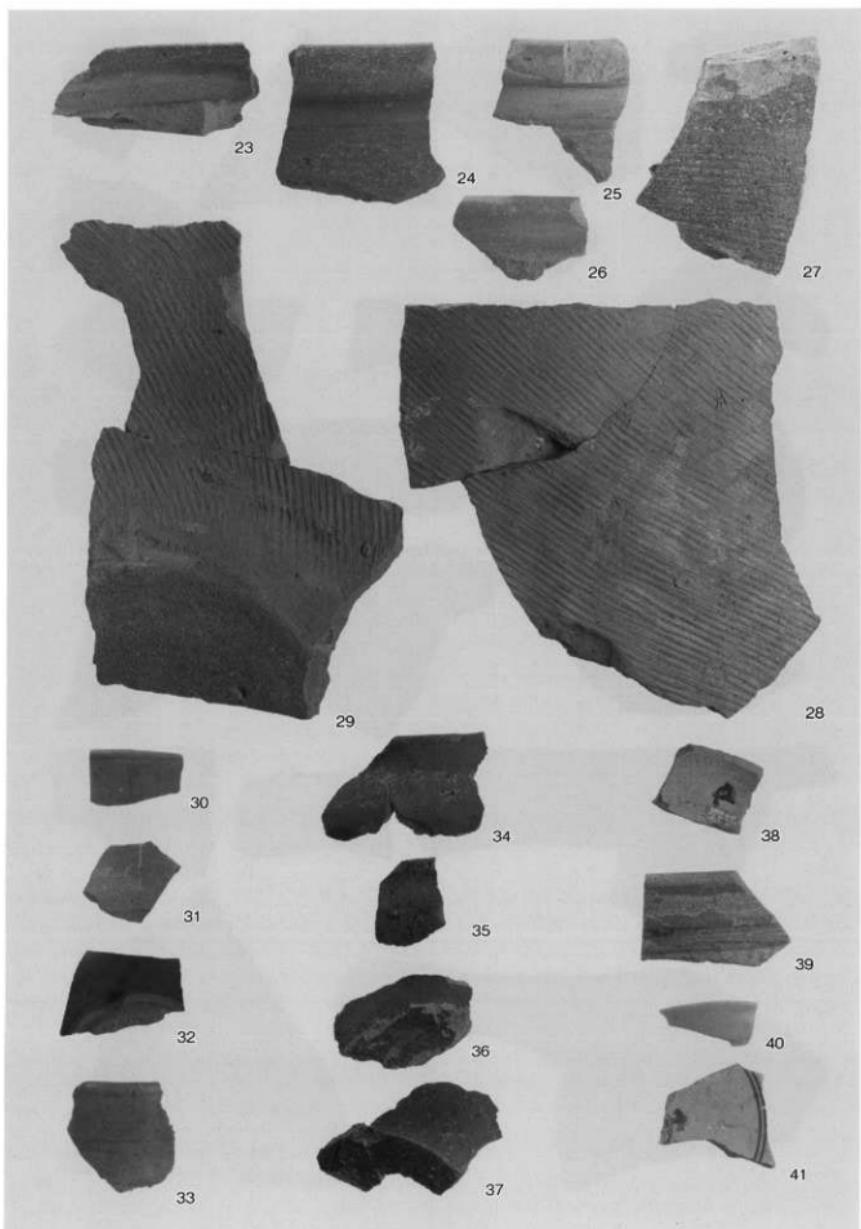


8

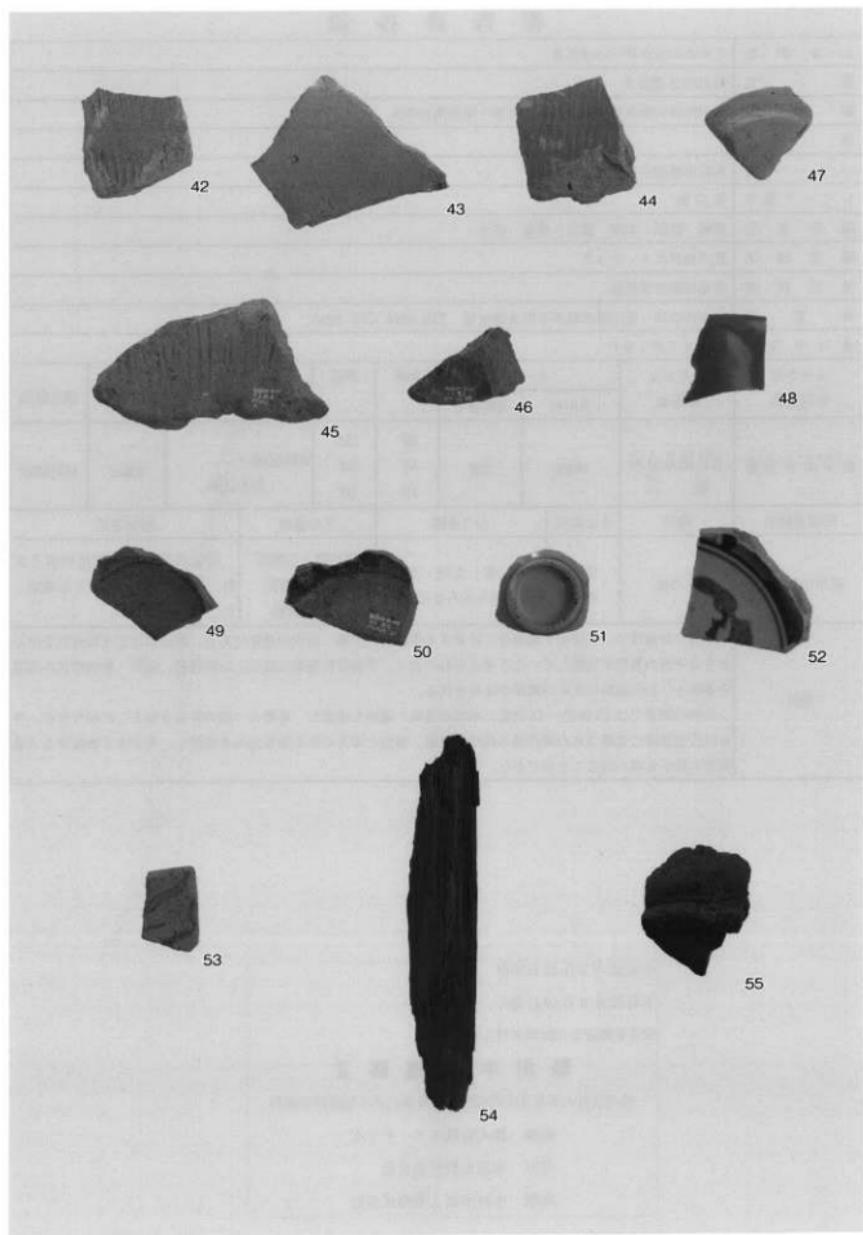
図版9 1. SP07 土層断面（東から） 2. SX02 土層断面（南から） 3. SX03 土層断面（南から）
4. SX03 土層断面（南西から） 5～7. 作業風景 8. ラジコンヘリコプター撮影風景



図版 10 遺物写真 (1) 遺構出土遺物 (須恵器・土師器・珠洲焼)



図版 11 遺物写真 (2) 遺構出土遺物 (珠洲焼・青磁・その他陶磁器類)



図版 12 遺物写真 (3) 表土・擾乱出土遺物 (須恵器・珠洲焼・土師器・青磁・その他陶磁器類)・石製品・木製品

報告書抄録

ふりがな	くらかわなかびーいせきⅡ							
書名	鞍川中B遺跡Ⅱ							
副書名	金沢医科大学氷見市民病院事業に伴う発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第57冊							
編著者名	廣瀬直樹・大西健吾・後藤浩之							
編集機関	株式会社エイ・テック							
発行機関	氷見市教育委員会							
所在地	〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号 TEL 0766(74)8215							
発行年月日	2010年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
鞍川中B遺跡	富山県氷見市 鞍川	16205	354	36° 51' 13"	136° 58' 00"	20091026 ~ 20091120	336m ²	病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鞍川中B遺跡	その他	中世 近世	流路・溝・土坑・小穴・ 落ち込みなど	須恵器・土師器 珠洲焼・青磁 近世陶磁器	近世以降の旧耕作地の段と流 路、中世の遺構の広がりを確認し た。			
要約	鞍川中B遺跡は、上庄川下流南岸に位置する弥生時代中期～近世の遺跡である。周辺には13世紀代を中心とする中世の集落が展開していたと考えられており、平安時代後期に成立した阿努莊、室町・戦国時代の当地を本拠とした土豪鞍川氏との関係が注目される。 今回の調査では13世紀～14世紀にあたる遺構・遺物を確認し、集落の一端の存在を知ることができた。さらに近世以降に造成された耕作地の段や、流路、溜池と考えられる落ち込みを確認し、現在まで継続する土地利用の様子を窺い知ることができた。							

平成22年3月15日印刷

平成22年3月19日発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第57冊

鞍川中B遺跡Ⅱ

金沢医科大学氷見市民病院建設事業に伴う発掘調査報告

編集 株式会社エイ・テック

発行 氷見市教育委員会

印刷 中村印刷工業株式会社